
けいおん！ Another school story

ツリー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！Another school story

【Nコード】

N4260P

【作者名】

ツリー

【あらすじ】

共学になった「桜ヶ丘高等学校」。

廃部寸前の軽音部に入部した加藤渡はどのような影響を及ぼすのか。

（ヒロインは湊の予定でしたが・・・今別の人を考えています。まさかまさかのあの人です）

序章

布団の外の世界というものは再び布団の世界へと戻そうとする空気が充満している様な気がするのは気のせいだろうか。特に冬が終わり春が来ようとしているこの季節の変わり目の時期はそう思う。が、今日はそんな事は言っていられない。

今日は俺の高校の入学式がある。入学式当日から遅刻なんてのは流石に出来ない。

俺がこれから3年間通う高校の名は「桜ヶ丘高等学校」。元は「桜ヶ丘女子高等学校」だったらしいが方針を今年から変えて共学にする事が上の方で決まったらしい。実力も結構あるらしいし俺が高校受験で受けた中ではそこが最上位だったので迷わずそこに行く事にした。

ジリリリリリリリリリリリリ！と毎度の様に喧^{やかま}しい目覚ましのベルが鳴り響く。

「んああ、煩っせえなあ！」

少々八つ当たり気味に目覚ましの上を叩いてベルを止める。

「ふう・・・今日からか・・・」

制服に着替え、洗面所で顔を洗い、台所に行くと母さんが朝御飯を丁度皿に盛り付けているところだった。

？

「おはよう」

母

「あら、おはよう渡。いよいよね」

渡

「まあな・・・」

おつと自己紹介が遅くなってしまったな。俺は加藤渡。先程も言ったが今日は高校の入学式。普段の起床時間は・・・まあ、普通だ。速すぎず遅すぎずって感じ。だが今日は何度も言っが入学式なので少し早目に目覚ましをセットした。

朝御飯を平らげ、鞆に今読んでいる小説と筆記用具の放り込む。

渡

「じゃあ行ってくるな」

母

「えっ、ちょっと早いんじゃない？」

渡

「早目について少し空気に慣れておきたい。何せ去年までは女子高だったらしいからさ」

と、いうわけでそれから歩き出したのだが・・・

結論から言おう。親の言う事は聞いておくべきだった。早起きは三文の徳という諺がある。が、幾らなんでも早すぎた。校門に着いた

時、後者に設置してある少し大きめの時計が差していた時刻は7時20分。流石に早すぎた。どうやら他に男子生徒は来ていない様で気まずいことこの上ない。誰か女子でもこの際構わないから今年の入学者はいないだろうか・・・と不振がられない程度にキョロキョロとあたりを見回すと・・・いた。

髪は茶髪でセミロング。前髪にヘアピン（？俺は女子が髪につける類のものはカチューシャ以外はよく分からない）を付けてどうしようとしても言いたげにオロオロしている。

渡

「おい」

？

「ふえっ!？」

ビククリして飛び上がるソイツ。後ろから肩を叩かれてビクつくのは女子だから分からないでもないがそれにしただってオーバーリアクションだ。

渡

「何やってんだこんなトコで」

？

「あ、あの、私時計を見間違えて結構早い時間帯に来ちゃって入学式までどうしたらいいのかわかって。そう言うキミは？」

渡

「俺は・・・早目に来て少しでもこの場の空気に慣れておこうと思ったんだが・・・裏目に出て早目に来過ぎてしまった」

？

「ふうん、何だか似てるね。そう言えば見ない格好だけどうしたの？」

渡

「お前、自分の学校の情報位キチンと収集しておけよ。今年から学校が改名をして共学になったんだぞ」

？

「ああ！そう言えばそうだったね」

コイツかなりの天然だな。関わる事はもうないだろうが、一期一会名前位聞いておく事にしよう。

渡

「ところでお前、名前は？」

？

「私はね、平沢唯っていうんだよ。君は？」

渡

「俺は加藤渡」

唯

「渡君かぁ。じゃあワっくん！」

渡

「初対面のやつに自己紹介の直後にあだ名をつけるとわな。まあ、好きにしろや・・・」

俺はクラスの名簿が書かれた表を探しに行った。流石にこの状況で落ち着いて小説を読めそうではないしかと言ってボーっとしているのも何かな・・・

校舎の中にある下駄箱がやつと解放され新入生の関心は当然自分が何処のクラスかという事に向けられる。俺もその中の一人だけどころか1年3組。それが俺の今度のクラスらしい。無言で1・3とプレートに書かれた教室に入る。名表を見た時も思ったがやっぱり今年共学になったばかりという事もあって男子は女子と比べてはるかに少ない。何しろ1クラスに10人もいないのだ。まあ、男子高から共学になるよりは幾分かマシだろう。

自分の席について鞆を下ろし一息つくこうとすると、

「ここかあゝ！」

とつい数分前まで耳にこびりついていた黄色い声が。

唯

「あつ、ワつくんだ。ワつくゝん！」

声の主、平沢唯は俺を見つけると真っ直ぐにコッチに向かってくる。

唯

「ワつくんも同じクラスだったんだね。良かったゝ」

渡

「突っ込みたい所は色々あるが・・・まず嬉しい気持ちは分からない

くもないがそんなに大声を出すな。物凄く目立つ。あとあだ名を使う事に関しては好きにしろと言ったがこんな大勢人がいそうなところでは止めてくれ」

唯

「え、いいじゃん。ワつくんって親しみやすいじゃん」

渡

「さてと、そろそろ行動に移らないとな。入学式に間に合わなくなるぞ。はあ、それはそれで退屈だけだな」

この時は知る由もなかった。まさかあの二人がここに来ていたなんて事は・・・

序章（後書き）

どうも、もうこの癖は直る気配すら見せようとしないう私ツリーでございます。

彰

「ホントですね」

こんな駄作でも感想を送って下されば本当に嬉しいです。書いた甲斐があるというものです。

どうぞ宜しく。

廃部！？（前書き）

2話目です。

今回かなり長いです。何しろ「廃部」を1回で書きちゃったから。

渡

「無茶苦茶だな」

彰

「コッチも忘れないで下さいよ」

では、どうぞ。

廃部！？

学校長訓示やら入学生代表の言葉やら面倒で画一的な儀式的行事が一通り終了し、校舎を見て回る。すると各部の先輩が自分の部如何ですか？自分の部へ是非、とウジャウジャと現れたと思つたらビラを渡してさつと行つてしまった。どこも熱心だな。1年後には俺もそういう事をする立場になつてゐるんだろうなあ。

それにしたつてやつぱり去年まで女子高であつただけあつてソフトボール部はあつてもサッカー部とか野球部とかラグビー部とかの男子専用の部活は一つとしてなかつた。まあ、これから出来ていくんだろうけど・・・

ん、そういうえば中学や高校にはある事が約束されていて俺が最も入部希望したい気持ちが強いあの部のビラがどうしてないんだ？お知らせの紙が貼つてあるショーケースにもその情報はない。どうしようか。まあ、担任に聞いてみるか。

渡

「あの、先生」

担任

「ん、どうした？」

渡

「ウチって軽音部ないんですか？」

担任

「軽音部？・・・ああ、今は廃部、というより廃部寸前だな」

何だと！？と叫びたかったが止めておいた。流石に執務室で大声は出せない。

担任

「去年まで所属していた奴は全員引退してしまったから、今月中に5人部員を募らないと正式に廃部だな」

渡

「そうですか・・・」

ガツクリ首を頂垂れて俺は執務室を出た。入学早々この高校に来た目的の一つを失っちまった。仕方ない、ちよっと遅いとは思うが他の部を見部してみる事にしよう。

その頃、唯は入部希望用紙を目の前にして悩んでいた。

唯

「うーん、どうしよう・・・」

そこへ幼馴染がやってきた。

？

「どうしたの唯？」

唯

「あつ、和ちゃん。私、何処の部活に行こうか迷ってて」

和

「ええっ！まだ決めてなかったの！？入学式からもう2週間経ってるわよ」

それを聞いた途端に唯はオドオドしだした。

唯

「で、でも私運動音痴だし、文化系のクラブもよく分からないし・・・」

和は呆れて

和

「はぁ・・・こうやってニートが出来上がっていくのね」

と呟いた。が、唯にはそれが意外にグサリと来たらしく

唯

「部活やってないだけでニート！？（悲）」

またまた別の所では・・・

廊下。

？

「漣っ！」

漣

「ああ、律か。どうしたんだ？」

律

「クラブ見学行こうぜ」

漚

「クラブ見学？」

律

「軽音部のだよ、軽音部の！」

漚

「でも私、文芸部に入るつもりだし・・・」

漚が提出するつもりで書いた入部届け。律はそれをジッと数秒間見つめた後、微塵の躊躇も無くビリーツ！と縦に破いた。

漚

「わぁっ！何すんだよ律っ！」

律

「ほら、行くぞ早くっ」

律に手を引っ張られながら執務室に軽音部の場所を教員に聞こうとする漚。が、

律

「えっ！？廃部した！？」

教師

「正確には廃部寸前ね。去年まで所属していた部員が全員引退しち

やったから、今月中に最低5人の部員が集まらなかったら正式に廃部って事になるわ」

唯

「先生っ！」

教師

「あつ、はい。じゃあね・・・」

残された二人。

澪

「廃部なら仕方ないな。私は文芸部に・・・」

と回れ右をしたと思っただけで律に左肩をがしつと掴まれた。

律

「誰もいないって事は、今入部すれば私が部長。ふふ・・・悪くないわね」

そうして最上階の音楽室に来た二人。

澪

「で、どうするんだ？」

律

「入部希望者を待つ！」

と律は「俺に賛同する物は此処に集え」とでも言いたげそうに教壇

の上にあつた椅子にどっしりと腰を据えている。

夕日が傾き、光が当たっていた階段の銅像の亀の甲羅が暗くなった。
一向に誰も来る気配がない。

漣

「・・・帰ろつか」

と思つた矢先、

？

「あの、見学したいんですけど・・・」

と何処かポワポワした女子が入ってきた。当然その女の子に律は食らいつく。

律

「軽音部の！？」

？

「いえ、合唱部の・・・」

律

「軽音部に入りませんか？今部員が少なくて・・・」

漣

「そんな強引な勧誘したらダメだろう！じゃあ私も帰るから・・・」
と音楽室を出ようとすると・・・

律

「漚っ！あの時の約束は嘘だったのか！？」

と涙声になって叫ぶ律。

律

「あの時一緒にライブに行って……これだって共感して……そして私がドラムで、漚がベースで……一緒にバンド組もうって……」

念のために言っておくが律はこの時涙目演技の為の目薬は使用していない。

律

「そして……メジャーデビューしたらギャラは7：3で……」

漚

「捏造するな！」

とおでこに手刀のチョップをくらった。

そんな中見学に来ていたおっとりしていた子が、クスクスと笑いだした。

？

「何だか楽しそうですね。キーボード位しか出来ませんが私で良ければ入部させて下さい」

律

「わあ！ありがとう！えつと・・・」

？

「琴吹紬です」

律

「よっし、あと二人部員を募れば・・・」

漣

「私もう数に入っているのか・・・」

翌日、部室にてー

漣

「でもどうやって残りの部員を集める？」

紬

「とりあえず部の勧誘ポスターを書いてみませんか？」

律

「おお、それいいな。じゃあ明日までに書いてくる事。じゃあ解散
！」

そしてまた翌日。

律が書いてきたものは最早^{もはや}軽音部勧誘のものになっていなかったの

で却下。漣のは文字やらイラストやらが全体的に小さすぎて却下。結局、細が書いてきたものをショーケースに貼る事になった。

ー唯視点ー

高校に入ってから何かやらなくちゃいけない様な気がするんだけども一体何をしたらいいんだろう？和ちゃんにも呆れられちゃったしワつくんは何処も入らないって言ってたし頼れる人がいないから本気で困っちゃう。もう一回勧誘の紙を見てみようかな・・・

前はなかったポスターがある。けいおんぶ。軽い音楽と書いて軽音。ここなら多分簡単な事しかやらないだろうから私でも出来るかも。

唯

「という訳で、とりあえず軽音部ってトコに入ってみました！」

和

「へえ。それってどんなことするの？」

唯

「さあ？」

和

「え・・・」

唯

「でも軽い音楽っていうからきつと簡単な事しかやらないよ!」

和

「何そのやる気のない部活・・・?」

弁当を食べ終わってからまたショーケースと一緒に見に行った。

和

「ほら、ギターリスト募集しているらしいしバンド活動をするみたいよ」

唯

「えゝ、私ギターなんて弾けないよゝ」

和

「じゃあ何なら弾けるの?」

唯

「力・・・カスタネット!」

和

「とってもよく似合うわ・・・」

そして、その日の放課後、

唯

「(やっぱり辞めるって言いに行こう。私ギターなんてサッパリ出来ないし・・・)」

とは思うもののその途中にある「ホラー研究部」だの「妖怪倶楽部」だの何だかに似通っている様に思える部活が唯の足の進行を妨げる。お陰でフラフラしていて誰かが見ていたら100人中100人が危なっかしいと思うに違いない。

実際に、

ドン！と誰かにぶつかった。

唯

「わっ！」

？

「何フラフラしてんだよ。大丈夫か？」

声の主は渡だった。

唯

「あっ、ワっくん」

渡

「ワっくん、じゃねえよ。何足元ふらつかせてウロウロしてんだよ。熱でもあるのか。だったら保健室連れて行ってやるけど」

唯

「いや、そうじゃないんだけど・・・軽音部の部室に行こうと思っ
て・・・」

渡

「そうかい。で、何でそんなにフラフラなんだよ」

唯

「じ、実は辞めたいって言いに行こうと思うんだけど軽音部って何だか怖いイメージがあって・・・」

渡

「あっそ」

そのまま下駄箱に行こうとする渡。がしつとその腕にしがみつく唯。

渡

「何だよ」

唯

「お願い！音楽室まで一緒に行つてえ！（涙目）」

渡

「何でだよ」

唯

「お願い！一緒に来てくれるだけで良いから！」

唯が涙目に上目遣いまで加えてきやがった。チクシヨウ、反則だぞソレ。

渡

「わっつたよ。しょうがねえな。ほら、さっさと行くぞ」

唯

律

「ん、ところで君は？」

渡

「俺はこいつの付き添い。もしかして君も入部希望者！？」人の話を最後まで聞きやがれ！」

なんだこのカチューシャは。と頭で考えるまでも無くそいつは俺と唯を部屋に引っ張り込んだ。

律

「皆、入部希望者が来たぞ！」

澪

「本当か！？ようこそ軽音部へ！」

紬

「歓迎します！」

律

「よし、ムギ。お茶の準備だ」

紬

「はい」

物凄く辞めるとは言い辛い雰囲気だ。唯じゃなくても万人そうだと思うぜこの空気は。ただでさえ廃部寸前で部員を集めようと必死になっているさなか、入ってきたやつが即刻止めると言いに来たなんて聞いたらそのショックは決して小さくない筈だ。

出されたお菓子と紅茶。流石に御好意で出してもらったものを結構ですなんて突っ撥ねる事は出来ない。

律

「平沢さんはどんなバンドが好きなの？」

つつか、座られるまで気付かなかったが、よく見たらカチューシヤーは田井中であの長髪は秋山じゃないか。って、秋山って結構恥ずかしがり屋であんまり目立つ事は好きじゃなかった筈。じゃあどうして……って聞くだけ野暮か。大方、田井中に強引に入部されられたんだろう。

唯

「あの……実は……私、辞めるって言いに来たんです！」

ズーンと重くなる空気。そりゃそうだ。まあ、言わなきゃ言わないで別の問題が起きていただろうが。

紬

「そ、そうなんだ……」

唯

「ゴメンナサイ……」

漣

「でもウチに入ろうとしたって事は音楽には興味があるって事だよ

ね？」

律

「何なら出来るの？」

唯

「力、カスタ・・・ハーモニカ！」

律

「それならあるよ」

唯

「ごめんなさい吹けません！」

意地を張るな唯。それと田井中。何でお前はハーモニカなんぞ持ち合わせている。

澪

「じゃあとりあえず私達の演奏を聴いてみない？」

唯

「えっ、演奏してくれるの？」

まあ、秋山達からすれば折角入ってきてくれたんだからここで手放してなるかって心境なんだろう。

秋山がベース。田井中がドラム。まあ、らしいと言えばらしいチョイスだな。あのおっとりした人はキーボードか。何処かお譲様みた

いな雰囲気醸し出しているし結構上手かったりしてな。

演奏している曲は「翼をください」。まあ、無難だな。

演奏が終わった。ゆったりとしたリズムで俺的には良かったと思う。

唯

「おお」

渡

「……………」

とりあえず拍手だろう。

律

「えへへ、ど、どうだった？」

唯

「何て言うか、言葉にし難いけど……あんまり上手くないですね！」

律&渡

「（バッサリだー！）」

唯

「でも……すごく楽しそうでした。私、この部に入部します！」

3人は大層喜んでいた。

律

「本当!？」

漣

「ありがとう!」

始めはやめる事を言いに来たらしいがまあ、唯が自分で決めた事だ。俺がとやかく言う事じゃない。

渡

「じゃあ、俺はこの辺で失礼するわ」

と、鞆を背負って部屋から出ようとする。

律

「ああ!そういえば部活に必要な人数は最低5人だった・・・」

振り返らなくても分かる。4人の視線が俺に集中している事が。振り返るな、こうなる事を予め予測して一応対策はしてあるんだからな。

渡

「・・・・・・・・」

俺は無言で部屋を出て行った。

律

「えっ、ちょっと!ここまで来てそれはないでしょ!?!ねえってば

「！」

それでも俺は無視して階段を下りて行った。

多分田井中達は絶望しているだろう。やっと廃部の危機から脱出で来たかと思いきやそうではなかった事に。

―部室―

律

「せっかく廃部しないで済むと思ったのに……」

漣

「バンドも組めずに廃部か……」

唯

「ワっくん……」

紬

「……あら、何かしらこの紙？」

ふと紬がテーブルを見ると丁寧に4つに折られた紙がある。

漣

「これってもしかして……」

律がその紙を開ける。

それは入部届けだった。それを見た瞬間に律の眼はパァッと輝いた。

律

「やった〜！もう一人入部希望者がいたぜ〜！」

紬

「やっぱり入部用紙だったのね」

律

「え〜、何々、名前は・・・加藤渡！？」

漑

「えっ！？」

律と漑はその名に驚いた。

律

「加藤渡って、あの渡だよな、漑？」

漑

「そ、そうじゃないか？」

唯

「あれ、コッチにも何か書いてあるよ」

入部用紙の裏側。本来なら何も書かなくて良い所に何が書いてあるのか。

律

「『よく見る』・・・だと？何を見ろっていうんだよ」

「……ああ！」

表側。記入する部分で、一番上が『仮』入部届けになっていたの
ある。勿論申請紙にそんな事は書いていないから本人が書いたに
他ならない。が、それにしたってよく出来ている。

律
「くうっ！ハメられた！」

紬
「でも、記入が必要な所はキチンと書いてあるから入ろうっていう
気はあるんじゃないかしら？」

澪
「それもそうだな」

唯
「きつとワつくんなら入部してくれるよ」

律
「ワつくん？誰だそれ？」

唯
「渡君だよ。きつと来てくれるよ」

澪
「その根拠のない自信は何処から……」

紬

「でもやっぱり渡君を信じて待つしかないさそうですね」

律

「はあ、何であらぬ心配をせなあかんのだか」

そして日にちは経ち4月30日。

唯

「来ないね」

漣

「本当にバンドも組めずに廃部か」

律

「それだけは絶対に嫌だ〜！」

そこへ、ガチャリと戸を開ける音がする。一斉に振り向く4人。
待っていた人がようやく訪れた。

渡

「悪い。遅くなった」

この瞬間、軽音部はスタート地点に立った。

廃部！？（後書き）

ふう、終わった〜！

ヤバイ、超疲れた。

感想など遠慮なく送ってください。お待ちしております。

楽器？（前書き）

2話の前半です。

最近は前書きとあとがきで書くネタがなくて困っております。

そちらの方も何かありましたら案を送ってください。

では、どうぞ。

楽器？

帰りのホームルームが終わり、生徒は皆各々の行くべき場所に足を運んでいる。さて、俺も部室に行こうとしようか。

和

「唯、一緒に帰ろう?」

唯

「あ、和ちゃん。ごめん、今日どうしても部活に行かなくちゃいけないくて・・・」

和

「そっか。じゃあ仕方ないわね。（唯にも打ち込めるものが出来たのね。嬉しい様な悲しい様な・・・）」

ふと見ると唯が口から若干涎を垂らしている。

和

「どうしたの唯?」

唯

「今日はムギちゃんが美味しいお菓子持ってきてくれるんだ」

和

「ギターやるんじゃないの?」

唯

「あつ・・・エへへ・・・」

幼稚園の時も、小学生の時も、中学生の時も何気にボーっとしながら過ごしていたけれど・・・高校に入って初めて唯は部活を始める事となった。その表情はキリリとしまつて輝く未来を見つめている様だった。

しかし今考えても驚く。唯のやつがオロオロしながら音楽室まで同行した時、まさか田井中と秋山に会う事になるなんてな。あいつ等とは小学校を卒業して以来だろうか。

部室に着くと田井中や秋山、琴吹は既にいた。後は唯だけか。

やがて唯も来た。まあ、今日はお互いの事を知る日って事でも別に構わないだろう。

一応ここからはメンバー紹介だ。

ー唯視点ー

私達が桜ヶ丘軽音部の新しいメンバーです。

ベース担当の秋山澪ちゃん。背が高くてカッコイイ大人の女性って感じです。

唯

「ねえねえ、何で澪ちゃんはギターじゃなくてベースをやるうと思っただの？」

澪

「だってギターは・・・は、恥ずかしい・・・」

唯

「恥ずかしい!？」

澪

「ギターってバンドの中心って感じで先頭に立って演奏しなきゃならないし、観客の視線も自然と集まるだろ？自分がその立場になるって考えただけで・・・」

ドカン!と澪ちゃん火山が噴火しちゃった。結構繊細みたい。

キーボード担当の琴吹紬ちゃん。おっとりポワポワ。可愛い人です。

唯

「ムギちゃんはキーボード上手いよね。キーボード歴長いの？」

紬

「私、4歳の頃からピアノをやってたの。コンクールで賞を貰った

事もあるのよ」

唯

「へえっ。凄いね!」

テーブルにはケーキやらお菓子やらが所狭しと並んでいる。

唯

「そう言えばずっと気になってたんだけどこの部屋ってやけに物が充実してるよね。最近の高校ってこんな感じなのかな?」

渡

「それは俺も思ってた」

紬

「ああ、それはね、私が自宅から持ってきたのよ」

唯&渡

「自前!?!」

どうやら結構なお譲様の様です。

ドラム担当の田井中律ちゃん。

元気一杯の明るい女の子です。

唯

「でもあん時は結構女子から好まれたじゃねえかよ」

渡

「知るか。男子にしろ女子にしろ友達が多い事に越したことはねえけど、アレは只の騒音集団だつつうの」

律

「おまけに左利きだし」

それを聞いた途端に漣が俺に迫ってきた。

漣

「そう言えば渡って左利きだったよな」

渡

「まあな。だからギターも・・・」

俺はその足で自分のギターをケースから取り出す。因みにそれは黒に磨きがかかった左利きのレスポールだ。

唯

「へえ、カッコいい！」

律

「ついでだ。何か弾いてみてくれよ」

渡

「やだ」

律

「はあ？部長命令だぞ」

渡

「部長命令だろうがなんだろうがやらなきゃ結局はやらないんだよ。ところで唯、お前もウギターは買ったのか？」

唯

「えっ？あつ、そうか忘れてた。私ギターやるんだった」

澪

「軽音部は喫茶店じゃないからな」

渡

「つーか、その目的を忘れて今まで何の為に此処に来てたんだ？」

唯

「えへへ、ところでギターって幾らぐらいするのかな？」

澪

「うーん、安いのは1万円台からあるけどあんまり安すぎるのも良くないからな。5万円位がいいかも」

唯

「5万！・・・私のお小遣い10か月分・・・」

澪

「高いのは10万円以上のもあるぞ」

唯は満面の笑みで律に向かって

唯

「部費で落ちませんか？」

と問いかけるも（ある意味当然と言えば当然なのだが）答えは

律

「落ちません」

だった。ガツクリする唯。

律

「そついえば渡のソレは幾らしたんだ？」

渡

「コイツ？コイツは15万したぜ」

その言葉が還つて唯の気落ちさせたらしい。えっ、俺今何か言つてはいけない事を言つたか？

紬

「唯ちゃん、これ美味しいわよ」

琴吹に渡されたお菓子を食べて幾分か表情はよくなった。

漣

「とにかく楽器を持たない事には始まらないんだし」

律

「よっし！じゃあ今度の週末にギター見に行こうぜ」

まあ、そういう事になった。

その日の夜、唯は貯金箱の中身をかき集めてみた。10円玉の多い事多い事。全部集めたら1千円札1枚分くらいにはなるかもしれない。が、何れにせよ全く足りないのは事実。ガツクリと首を垂れた。関係はないが着ているシャツに書かれている文字はハネムーンである。

唯

「無念なり」

そこへ、

？

「お姉ちゃん」

と誰かがドアをノックして入ってきた。彼女の名は平沢憂。唯の妹である。

唯

「ほい？」

憂

「お姉ちゃんご飯だよ……ってどうしたの何かあったの？」

唯

「憂、私軽音部に入ってたんだ」

憂
「えっ」

唯

「でね、ギター買いたんだけど・・・」

憂

「へえ、お姉ちゃんギター弾けたんだ？」

唯

「うっん、全然！でね・・・」

唯が両手の人差し指をくつつけてグルグル回しながら、

唯

「お金を貸していただけじゃないでしょうか？」

とかなり弱々しい口調でお願いしてみた。が、

憂

「ごめんね。私もあんまり無いんだ」

唯

「ですよね・・・」

憂

「お母さんにお小遣いの前借頼んでみたら？」

唯

「えっ？」

憂

「私も一緒をお願いしてみるから」

唯

「流石憂。頼りになる」

憂

「えへへ」

そして週末。天気は晴れ。白い雲が少しあつて気温も暑すぎない位。快適な環境っていうのはこういう事を言うんじゃないだろうか。秋山も田井中も琴吹も来ている。何で肝心な唯が1番最後なんだよ。まあ、遅刻している訳ではないけれどこういうのは普通用件がある人が先に来てるってモンじゃないのだろうか。そんな事を考えながら反対側の横断歩道を見ているとやっと来た、と思いきや走って人にぶつかるやら誰かの飼った犬の頭を撫で回しているやら何で後数メートルという所で辿り着けないんだアイツは。多分遼祐さんも同じことを考えていたんだろうなあ。

で、やっと全員集合。お金は唯が自分から親に交渉して出してもらったらしい。まあ、俺もあのレスポールを買ってもらう時は粘ったからなあ。どこかの銀行のCMじゃないけどキッチンと計画的に使わなきゃと言ってたその時点ではまあしつかりしているなあと思ったのだが・・・

さて、では楽器屋に行こう、としたらなんと唯がとある店の店頭にある洋服に目を奪われてそこに釘づけに。田井中が引き剥がそうとするが「ちよつとだけ」と言つてそこから離れようとしな。御約束事なんだけどな、ちよつとだけという奴に限つて絶対かなり時間を喰うのは相場で決まる以前にもう暗黙の了解になつてゐるんだよ。・・・つて聞いちやいねえし。田井中は「ミイラ取りがミイラになる」状態になつてゐるし琴吹はニコニコしてゐるだけで全然止めようとしねえし秋山は止めようとこそしてゐるものの、田井中に店の中に引つ張られちまうし。ついでに俺は巻き添えを喰らうハメになつたし。大体女性の服専門店の所に男子が当たたらどれだけ気まずいかお前ら少しは考えろよ。

で、そこを出たと思つたら今度はデパ地下で試食用の羊羹^{ようかん}を喰べたり、ゲーセンでUFOキャッチャーをしたり。で、今は偶々目に入つた喫茶店で一息中。これ以上喰べたりしたら太らないか、と言おうかと思つたがそれで拳骨^{げんこつ}を喰らうのはゴメンだったから言わずにいた。

唯

「はあゝ、疲れたゝ」

律

「えっへへゝ、買つちやつたゝ」

紬

「楽しかったですねゝ」

渡

「（そりやお前らはそうだろうよ）」

唯

「次は何処行こうか・・・ん？何か忘れてる様な・・・」

渡

「・・・帰っていいか、俺？（怒）」

澪

「楽器だる楽器」

唯

「おお！しまった」

しまったじゃねえよ。何の目的で週末集まる事にしたんだよ。お前のギターをかう為だろうが。

そしてやっと目的の楽器店に着いた。店の名は「10GIA」

一階はどうやらCD売り場らしく楽器は地下の階の様だ。エスカレーターで地下に行く。

こういう店にはつきもののBGMが流れている。あと教本とか、シールドとか、チューナーとか。

唯

「凄い。ギターがいっぱい！」

唯、お前こういう雰囲気も知らないで軽音部に入ろうと思ったのか？ハッキリ言って無謀な気がするんだが俺は。

そんな中唯はどのギターにしようか迷っていた。まあ、誰だってそういうものだしな。この自分の相棒を見つけるまでの時間っていうものは後々考えると結構楽しいもんだぞ。数ある候補者の中から1つを自分が選んだ。かなりワクワクする時間帯だぜ。と、思っていたらふと唯が足をとめた。どうしたのかと思ったがツインネックを目の前にして、どうやって弾くんだコレ？みたいな表情をしている。確かにツインネックは使い慣れている人じゃないと扱う事も難しいだろうし、多分カイ・キー専用のものなんじゃないかね。（関係無い物を持ちこんだのは此処でお詫びします。すみませんでした）

律

「おーい、唯。どれ買うか決めた？」

唯

「うーん、何か色々あって・・・選ぶ基準とかあるのかな？」

渡

「当たり前だ。最終的には直感でこれってモノにすればいいだろうけど形とか重さとかネックの太さとかな。だから女子はネックが細くて「あつ、このギター可愛い」ここまで話してるんだから最後まで聞けよ！」

唯が見詰めているのは俺と同じレスポールだが唯は右利きなので形は左右対称。色は・・・オレンジっぽいが正確には何と言うのだろう。誰か教えてくれ。

しゃが見込んでそのギターを見つめ、動く気配すら見せない。余程

そのギターが気に入ったんだろう。が、

渡

「このギター25万するぞ」

唯

「あつ、本当だ。これは流石に手が出ないや」

紬

「このギターが欲しいの？」

唯

「うん・・・」

律

「唯、コッチに安いがあるぞ」

と呼びかけても全く応じようとしな。余程気に入ったんだろうな。

漣

「そう言えば私も今のベースが欲しくて、悩んで悩んで、何回も何回もお店に行つてやっと買ったんだよな」

律

「そう言えば私も中古のドラムセットが欲しくて値切つて値切つて値切りまくつたっけな」

漣

「店員さん泣いてたぞ」

律

「どうしてもあのドラムセットが欲しかったんだよ」

田井中、そういう心境つてのはバンドを始めようとする奴なら少なからず経験するもんだけど（現に唯が今その状況だからな）、お前の値切り交渉っていうのは・・・ちよつと想像したくねえなあ。

紬

「あの、値切るって？」

律

「欲しい物を手に入れるために努力と根性で負けさせる事だよ！」

紬

「凄い！何か懂れます」

田井中、自慢気に説明するな、それと琴吹・・・

漣&渡

「（懂れる要素が何処に！？）」

そして相変わらず真剣そうに目の前のギターを見つめる唯。すると突然田井中が

律

「よっし！皆でバイトしようぜ」

紬

「バイト？」

律

「そう。唯のギターを買う為に！」

唯

「そ、そんな悪いよ・・・」

律

「これも軽音部の活動の一環だって」

紬

「私、やってみたいです」

律

「よっし、じゃあやるぞ、おっ！」

紬

「おっ！」

相変わらず人の話を聞かないやつだが、こういう時の行動力というのは評価すべきかもしれない。前向きなのは田井中の取り柄の一つだからな。

だが、何のバイトをする事になるのやら・・・

楽器？（後書き）

はい、前半終了です。

突然ですがここでアンケートです。

彰

「コツチでもやるんですか」

固い事は言わないの。読者の皆様の案にも中々な物がたくさんあるんだから。

前置きはさておき、内容ですが渡が新歓の時に着る着ぐるみのモデルの動物は何がいいと思いますか？

案がある方は感想欄にて遠慮なく投稿して下さい。

普通の感想もお待ちしております。誤字脱字も見つかりましたら宜しく。

楽器！？（前書き）

後編です（見りや分かるわそん位）

今回は多分ほぼ渡視点です。

途中ちょっとだけ遷視点が入ります。

あとちょっとだけゲストが来ます。

楽器！？

翌日学校にアルバイトの許可を申請したら不自然と思えるほどアツサリと許可を出しやがった。何でも唯が和に事前に話していたらしい。そう言えばアイツは生徒会だったからな。まああの本人である唯は当然として俺や田井中はともかく秋山がどうなるやら。まあ秋山の事だ。人と直接接する様な類のものは、ほぼNGだと言っているだろう。琴吹は・・・やりたそうにしていたから多分心配無用だろう。

かくして放課後、部室に集まった俺ら。

早速田井中がバイトの雑誌をどっかから持ってきた。相変わらずいざって時の行動力だけはあるからなあ。

律

「おい、渡。聞いているのか？」

渡

「ん、何だよ？」

律

「ったく人の話は聞いとけつつうの。だから何かしたいバイトはあるのか？」

渡

「いや別に。何でも構わないぞ」

紬

「ティッシュを配るのはどうですか？」

漣

「む、無理・・・」

渡

「町で何かを配る奴って中々数が減らないし、意外に精神がすさむぞ」

紬

「じゃあファーストフードは？」

漣

「そ、それも無理かも・・・（宅配は怖い人が出てきたらと思うと玄關のベルが押せないし、ファーストフードはオーダーが聞きに行けない・・・）」

遂に秋山火山が噴火しやがった。何かアイツ、変な先入観でも持っているのだろうか。あり得なくはないか。小学生の間だけだったとはいえアイツや田井中と俺は一緒だった。だからアイツの若干引っ込み思案な所はよく知っている。

・・・何て自分で少し回想したら、

漣

「私、何でもやるよ！」

何か今までの秋山じゃ想像も出来ないような発言が飛び出した気がしたんだが気のせいかな。まあ、やる気になったんならそれは良い事だし別段俺が口出しする事じゃないしな。

最終的にバイトの内容は「交通量調査」に決定した。秋山の事を考慮した田井中の判断によるものだ。

その日の週末、珍しく(?) 全員時間前に集合した。唯は両手でやっとなららしい。結構気が利く妹さんなんだな。

係りの人からカウンターを貰い、早速スタートした。最初は唯と琴吹、次が秋山と田井中。俺は午後に回されたらしい。

ハッキリ言う。超暇だ。気晴らしにi pod 持ってきておいて正解だった。何聞いているのかって? 今は曲は聞いていない。

律

「おい渡。何聞いているんだ?」

渡

「大したものじゃないぞ」

律

「私にも聞かせてくれよ」

渡

「聞いてもいいが一瞬で聞く気失せるぞ」

そう言いながらイヤホンを外して田井中に投げ渡す。耳にはめ込んだ途端、

律

「うわっ、何だよこれ？頭が痛くなってくる……」

漣

「どれ？」

今度は秋山が聞いている。田井中ほどではないが直ぐに飽きてしまったようだ。

漣

「これ何だ？曲じゃないよな？」

渡

「ああ。これはリスニング用の文章を音声化したものをいれたんだよ。こういう時に耳慣らしに聞いておくには丁度いいからな。そういう田井中は何を見ているんだ……って雑誌の懸賞かよ」

律

「商品はギターだぜ！」

漣

「確かにこっちの方が早いかな」

渡

「（……幾らそのギターが当たったとしても唯が練習をする気を失くすかも知れないぞ……と言いたところだが、言わずにしておくか……）」

時計が12時を回り、一旦休憩になった頃、

唯

「ねえムギちゃん。すつごく美味しいんだけど、こんな高そうなお菓子何時も何時も貰っちゃっていいのかな？」

紬

「いいのよ。何時もいろんな方から頂いてるけど家に置いてても余らせてしまうから」

唯

「色んな人から余るほどお菓子を貰う家ってどんな家!？」

そんな中、秋山と田井中は腹部を擦りながら微かに親指を動かしていた。

律

「（ハッ！何時の間にか流れる雲の数を数えている!）」

澪

「（これが職業病ってやつか!）」

そしてその日のバイトは終わった。

律

「1日目終了!」

紬 「じゃあ、私は駅に行くから・・・」

律

「私と漣と渡はバスだな」

漣

「唯は歩きだろ？」

唯

「うん！」

紬

「また明日も・・・」

唯

「お菓子宜しく！」

紬

「頑張りましようって言おうと思ったんだけど・・・」

唯

「あつ、えへへ。でも余っているなら」

律

「ころころ、ころころ・・・ころころころころ・・・」

田井中がそう言い続けている間、唯の右手は明らかにカウンターを持つ構えになっているし、親指が動いている。

漣&渡

「（やっぱり職業病か）」

唯

「じゃあね〜！」

紬

「うん、また明日」

日が沈もうとしている方向に唯が進んで行こうとしている・・・と思ったら突如立ち止まってコッチに振り向いた。

唯

「みんな〜！本当にアリガトね〜！私、ギター買ったら毎日練習するよ」

その一言を録音しておけばよかったと俺は後々思った。

バス車内にてー

律

「なあ、渡。前から思っていたんだけどさ」

渡

「あん？」

律

「渡ってき、何で私達の事名字で呼ぶのになって」

漣

「あつ、それ私も思ってた。どうしてなんだ？」

渡

「親しき仲にも礼儀あり、って事だよ。馴れ馴れしいのは好きじゃないんだ」

律

「なあ、ちゃんと名前で呼んでくれよ。唯やムギだって名前で呼んでいるんだし」

渡

「その時になったらそうする。別に秋山や田井中が俺を名前で呼ぶのは好きにすればいいけど」

少々不機嫌そうな顔をしている二人。い辛い、と思っただが不意にバスの表示を見る。次はあの場所だ。咄嗟にボタンを押した。

漣

「おい、私達が降りるのは次の停留所じゃないぞ」

渡

「ちょっと用事があるんだよ」

少々逃げ口上ぽかったが流石に最後まで一緒にいると大量に小言をくらいそうなので、ささっと降りた。

降りた先、俺の足が向かった先にあるのは・・・大学病院だ。今まで言う機会がなかったのでここで言うが、俺の母親は医者、所属は救急救命部。腕は中々らしいが、エースと呼ばれる人には敵わないらしい。今現在はそのエースと呼ばれている人とチームを組んでいるらしいが・・・

この受付を通るのも久し振りだ。構造は以前歩きまわった事があるので完全熟知している。何度か巡回担当の看護師に注意されたこともあったような覚えもある。

ストレートに救命部に到着すると丁度母が手術を終えたらしく、上着を脱いでマスクを外して部屋から出てくるのが見えた。

母

「あら、渡。どうしたの？」

渡

「今日のバイトの帰り道だったからちょっと寄ってみたんだよ」

母

「そう」

そこへ、

？

「あの・・・」

と少々気の弱そうな少年が俺の真後ろにいた。

母

「あら、彰君。お久し振りね」

彰

「ど、どうも」

渡

「・・・誰？」

母

「私が今チームを組んでいる先生の息子さんよ。で、彰君、ここに来たのはやっぱり・・・」

彰

「はい、何時も迷惑ばかりかけて申し訳ありませんけど・・・」

そう言いながら彰は小包、基弁^{もと}当箱を取り出した。

母

「何時も偉いわね、彰君は」

そしたらコイツは急に手を振って、

彰

「そんな事ありません。母さんはいつも大変ですし、今の僕が出来るのは事くらいでしかないでしょうから」

何だコイツ。相当礼儀ってモンを知ってやがる。おまけに見た目も

結構頭良さそうだし。

彰

「じ、じゃあこれで失礼します・・・」

何か恐縮している様な態度でその場をあとにした。

渡

「何か、少し内気なやつだったな」

母

「そうね。お父さんが検事をされてて両親が年中ほとんど帰って来ないんですって。でも全く挫けないし、親の事を気遣うし。偉い子だと思うわ」

と、そこへ

？

「加藤先生、急患です。前立ちをお願いします」

母

「分かりました、金沢先生。じゃあ渡、またね」

渡

「ん、ああ・・・」

ん、待てよ。今さっき俺の母を呼んだ人って何か相棒みたいな感じ

だったし、もしかしてあの人が母とチームを組んでいるっていう先生？だとしたら、あの少年の名って金沢彰って事か？ずっと前に帰っちまったし、今すぐに確かめるすべはない・・・か。

と思っていたのだが、あの少年と再会するのはそう遠い日ではなかったんだ。

翌日。何故か若干不機嫌オーラを放つ二人（理由は多分アレしかないのだろうけど）をバックに昨日と同じ集合場所に到着する。今日は俺は2時間ごとに1回になっちまった。・・・別にいいけどよ。

琴吹と秋山のペアは別段特に問題はない。次に俺と平沢。その次が秋山と田井中。昼を挟み俺と琴吹。次が平沢と田井中。このペアが1番不安だったのだが（現に遠目で見てても不安だった）何とか職務はこなしていたらしい。そして最後は俺と秋山だった。

― 零視点 ―

いよいよ2日間のバイトも私と渡で最後になる。夕日が傾いてああもうそんな時間なんだ、と思える。この辺はそうでもないけどちょっと大きな道路とかはこれから帰りの車とかで大きかれ小さかれ混雑するんだろうなあ。

渡は・・・何も喋らないで黙々と作業をしている。間近で見てみるとやっぱりカッコいいんだよな。ちょっと不愛想だけど・・・でもそれを十分にカバーできるくらいカッコいいしクールだし。

渡

「どうかしたか？」

顔は道路の方を向いたまま、渡が尋ねた。

漣

「べ、別に・・・」

渡

「そうかい」

そのまま会話は途切れ、時間が来るまでそれは変わらなかった。

渡視点――

そして2日間にわたるバイトは終わった。

職員

「どうもお疲れ様」

5人

「お世話になりました」

昨日と同じバス停。

律

「皆お疲れ様」

澪

「二日間で八千円か」

紬

「唯ちゃんがお母さんから前借りした5万円と合わせてもまだ全然足りないわね」

それぞれの封筒を握りしめた平沢は、何を思ったのか、

唯

「これ、やっぱりいいよ」

漣

「えっ」

唯

「バイト代は皆自分の為に使って。私、自分で買えるギターを探すよ。皆と早くギターの練習したいから」

今の一言も録音しておけばよかったな。

唯

「その代わりまたギター、一緒に見に行ってくれる？」

律

「勿論」

唯

「うん、じゃあまたね〜！」

そう言いながら満面の笑みで帰路の道を行く平沢。そのフードにこっそり俺のバイト代の封筒を入れたのだが、平沢が自宅に帰って妹さんに指摘されるまで気付かなかったなんて俺が知る由もない事だ。

そしてまた後日、またこの前の楽器屋にいる俺達。地下までエスカレーターで来たのは良いものの、平沢はまた例のギターの所でしゃがみ込んで動こうとしない。相棒はもうお前の中で決まっていたんだな。

しかし問題はやはり値段だな。田井中の値引き交渉っていうのは（今は状況が状況だから）見てみたいと思う反面、付き添っていた秋山の話から察するに店員を泣かせるほどのものだったらしいから、あまり使いたくはない。

と、思ってたらず琴吹が「ちょっと待ってて」と一人カウンターの方向へ歩き出した。何をする気だ。まさか田井中みたいに値引き交渉か？と思ってたらず一分後に戻ってきた。そしてその予想は大正解だった。

紬

「このギター、5万円で売ってくれるって」

は？コトブキサン、今何て言いました？

唯

「な、何やったの！？」

紬

「実はここ、ウチの系列のお店で」

マジかよ、と多分琴吹以外は全員思っているだろう。と言うより、それだったらこの前来た時にその話してくれよ。バイトしようとか思ったのが馬鹿みてえじゃねえか。しかも考えてみたらあの時一番に賛同していたのって琴吹だったんだよな。まあ、いつか。平沢もお目当ての相棒^{ギター}を手に入れられたし、終わり良ければすべてよしって事で。

その日の夜に平沢がギターを買った喜びのあまり、「ロマンス」の刺繍が入ったシャツを着てはしゃぎ過ぎて拳句、妹さんに「煩い」と言われたとか、添い寝していた事なんて、やはり知らない事だ。

翌日、部室に集まって唯のギター姿を垣間見る。以外にコレが結構似合っていたりするものである。

漣

「ギター持つとそれらしく見えるね」

律

「何か弾いてみてよ」

そこで平沢が弾いたのは・・・

渡

「何故にチャル・ラ？」

それでも間違えずに弾けたのは凄い事だが。

漣

「まだ家で練習とかしてないのか？」

唯

「いや、ギターってキラキラピカピカしているから触るのが恐くて」

渡

「練習しろよ」

漣

「そう言えばフィルターもまだ剥がしてないんだな」

そんな中、田井中が手を震わせながら勢いよくフィルターを剥がしやがった。うつしや、とか意味が分からない達成感(?)を上げたような表情かおをして。同時に青い顔をしている平沢。

漣

「律！唯に謝れ！」

律

「ゴメン！ほんの出来心だったんだ・・・」

渡

「嘘つけ」

紬

「唯ちゃん、このお菓子美味しいわよ」

漣

「そんなもので機嫌が・・・直った〜！」

さっきの傷心は何処へ行ったのか一心不乱でお菓子を口に運んでいる。平沢、お前の相棒^{ギター}に対するものってそんな程度のもだったのかよ。やっと食べ終わったかと思ったら、

唯

「そうだよ。ギターってやっぱり弾くものだよね。ありがとっちゃん。私、やる気出てきた！」

律

「そ、そうか。唯が練習するきっかけになればと思ったんだ。さすがわた・・・」

漣&渡

「調子に乗るな」

俺と秋山の両脇腹への肘打ちをくらった田井中。少し気の毒な気もするがまあ、出る杭は打たれるってやつだ。

唯

「ライブみたいな音を出すにはどうしたらいいのかな？」

渡

「平沢、お前そんな事も知らなかったのかよ」

漣

「アンプに繋がば出るよ」

ギターとアンプにシールドを繋ぎ、ジャラーンと音を出す平沢のギター。

唯
「カッコいい！」

渡
「ようやくスタートラインだな」

渡
「やっとスタートか」

律
「私達の軽音部」

紬
「ええ」

律
「夢は武道館ライブ！」

はあ！？何突拍子に言いやがる。

律
「卒業までに！」

本^{マシ}気で言^ハってやがる。

♪♪♪♪

平沢、何でそこでまたチャル・ラを弾く？

唯

「ゴメン、まだこれしか弾けないや。アンプに繋ぐのはもう少し先だね」

そう言いながらアンプに手を伸ばす平沢。このまま行けばどうなるか俺には分かっていたが、まあ体験する事も必要だと判断し、そのままにした。

漣

「あつ、唯っ！危ない！」

案の定、ボリュームを下げずにシールドを抜いたアンプからは聞き慣れていないと耳触りと言えろような音が響き渡る。

漣

「アンプのボリューム下げないでコード抜くと、そうなっちゃうん

だよ
」

唯

「は、早く言つて・・・」

まあ、こんな感じで正直先行き不安だが俺達の軽音部は活動が始まったのだ。それは武道館ライブまで1065日?!という頃のことだった。

楽器！？（後書き）

長いな。

渡

「確かに」

という訳でゲストは彰でした。

彰

「こんな事の為に呼ばれたんですか」

そつだよ。良かったでしょ、未来の先輩の姿を見て。

彰

「ネタバレ事項はやめて下さい」

二つの物語が交差する時・・・

渡

「某ラノベのキャッチコピー形式をパクルな」

はぁ・・・。疲れました。

次回は「特訓！」前半です。

彰

「感想や、誤字脱字の指摘などお願いします」

秋山のそういう所は全く変わっていない。変わる必要性も（少なくとも今は）無いと俺は思う。

漣

「オホン。まあ練習していくうちに指の先が硬くなっていくから、血が出るなんて事はなくなるよ。ホラ」

秋山が右の掌を差し出す。

唯

「おお、ホントだ。ぷにぷに」

と弄り始めた。まあ、実質秋山の言った通りなんだけどな。

・・・って長え。何時まで弄っている気だ。普通に20秒経ってるぞ。流石に秋山も恥ずかしくなったのか、

漣

「あの・・・もういいかな？」

唯

「も、もう少しだけ・・・」

そして漸く秋山の右手が平沢の指マツサージから解放された。そして次に何を言い出すのかと思ったら・・・

唯

「ギターを練習するって言っても、何から始めたらいいやら分からないや」

・・・つくづく思う、お前来る部活間違えたんじゃないのか。

漣

「はい、取り敢えず最初はコードを覚えるといいよ」

渡

「おい秋山。ベース担当のお前が何でギターの教本なんぞ持ち合わせているんだ？」

律

「何だよ、そんな言い方するなら渡が貸してあげたらいいじゃないか」

渡

「ああ、ダメダメ。俺の教本は左利き用のだから平沢が見たら一々左右逆に構えなくちゃならないからパニクって大変な事になる」

律

「フーン」

唯

「ま、まあまあ。漣ちゃんありがと」

と早速渡された教本を開く平沢。タイトルが『サルでも分かるコード』・・・よくこんな人をイラッとさせるネーミングを持つものが商品化できたな。

中を覗いた平沢。ギターをやるなら最低限の知識(?)として持っているべきDmやCm7やGm7という(平沢にとって)初めての記号ばかり(に本人は見える)に平沢は頭がショートし、シューと白煙が噴き出していた。

唯

「ま、まずは楽譜の読み方から教えて下さい・・・」

漣&渡

「そこから(そこからかよ)!？」

そして部活終了、最終下校時刻になった。途中の交差点で平沢と別れる。俺の通学路及び帰宅路は途中までは秋山、田井中と一緒にある。

唯

「じゃあまたね」

漣

「また明日」

律

「じゃあな」

渡

「……」

俺はただ手を少し振った。

平沢の帰宅路―

唯

「え〜っとこれがCでこれがDで・・・」

そこへ、

？

「唯」

と名を呼ぶ声が。

唯

「あつ、和ちゃん」

とCコードを構えたまま左手をあげる。

和

「何それ？新しい挨拶？」

唯

「えへへ、実は今日ギターのコードを教えてもらったんだ」

和

「へ。頑張っているのね」

唯

「そう言えば和ちゃん、今日帰るの遅いんだね」

和

「うん。図書館で中間テストの勉強をしてたから」

唯

「へ………えっ、中間テスト！？」

驚きの余り（何故か）右手でFコードを構える。

和

「それもコードなの……？」

唯

「そっか、もう中間テストなのか。折角頑張ってギター練習しようと思ったのに……」

和

「あんだ、中学の時から試験勉強なんてした事なかったじゃない」

唯

「そっか。なら大丈夫だね！」

和

「いや、大丈夫じゃないけど・・・」

所変わって渡達の帰宅路―

渡

「やれやれ、やっと部活が始まったかと思えば中間テストか」

律

「あれゝ、もしかして渡自信無いのかゝ？」

渡

「少なくとも全教科でお前に勝つ自信ならある」

田井中はそれを挑戦と取ったらしく、

律

「よゝっし！そこまで言うなら勝負するか！」

渡

「・・・好きにしろ」

律

「よし、そのつた！私が1教科でも勝ったら罰ゲームとして何でも言う事聞いてもらうからな」

渡

「それも好きにしろ」

律

「よっしゃー！絶対に勝つーっ！」

そのまま田井中は先に行ってしまった。

漣

「いいのか？」

渡

「構わねえよ。そんな事で一々勝負を申し込んでいる時点で、まだまだお子ちゃまだって事よ」

漣

「……………」

渡

「それより……ゴメンな」

漣

「な、何だよいきなり」

渡

「お前が平沢にコード表を渡そうとした時、思っても無い事を言っちゃって」

漣

「・・・そんな事気にしてたのか」

渡

「そんな事って何だよ！」

漣

「あつ、ゴメン・・・」

渡

「別にお前が謝る事じゃないだろ」

何だか気まずくなりそうだったので、秋山が話題を変えた。

漣

「でも、本当に大丈夫なのか？全教科で勝つなんて言っちゃって」

渡

「ああ、特段問題はない。それに仮に何か負けたとしたって要求してくる事は大した事じゃないだろうし」

漣

「た、例えば？」

渡

「『私達の事を名前で呼べ！』・・・とかさ」

漣

「!!!／／／」

渡

「まっ、大方そんな感じだろ。じゃあな」

漣は一人帰り道を歩いていた。あの時の渡の言葉が妙に心に引つ掛かっていた。

「『私達の事を名前で呼べ!』・・・とかさ」

何で渡は私達の事を名字で呼ぶんだろう。そう言えば唯の事も最初
は名前で呼んでいたけれども最近は名字だし。渡は馴れ馴れしい事
は好きじゃないっていうけど、お互い名前で呼ぶ事、これって馴れ
馴れしい事なんだろうか。それとも異性だから気にしているとか・
・

漣

「ってそんな事考える場合じゃない」

私も自宅に急いだ。

そして中間試験の時が来た。高校最初の。

全体的に問題はそう難しいと嘆くようなものではなかったが、中学の時に比べて難しくなったのは確か。が、所詮は基礎的なものが多くそこが定着していれば解けないものではなかった。

ところで平沢だが・・・

席がアイツより後ろなので分かるのだが、どうも危なっかしい感じがする。気のせいではない。真鍋を伺ってみても首を横に振るだけ。そしてその不安は現実のものとなった。

テスト返却日、部室―

律

「ふっつ、漸くテストから解放されたな」

紬

「高校になっていきなり難しくなったから大変だったわ」

漑

「そうだな。そして・・・此処にもっと大変そうなのが・・・」

平沢はもうそれこそ大変な事になっていた。言い表すなら魂ここに在らず、といったところだろうか。

漑

「そんなにテスト悪かったのか？」

唯

「ふっふっふ……ク、クラスでただ一人、追試だそうです……」

そう言いながら12と赤ペンで書かれた答案用紙を、手を震わせながら披露する。

澪&律&渡

「うわぁ……」

紬

「だ、大丈夫よ。今回は勉強の仕方が悪かっただけじゃない？」

律

「そ、そうだぜ。ちょっと頑張れば追試なんて余裕余裕！」

と田井中がガッツポーズをしたのに対し、

唯

「勉強は全くしてなかったけど」

と真顔で答える平沢。

渡

「おい」

律

「励ましの言葉返せコノヤロウ！」

ダメだコイツ。もう救いようがねえ。

律

「何で勉強しなかったのさ」

唯

「いや〜しようと思ったんだけど、何か試験勉強中ってさ勉強以外の事に集中出来たりしない？」

律

「あゝ、それ分かるな。部屋の掃除捗ったりとか」

唯

「勉強の息抜きにギター始めたら抜け出せなくなっちゃって、結局全然勉強できなかったの」

渡

「おいおい」

唯

「でもね、その代わりっ！お陰でコードがいつぱい弾ける様になったよ」

律

「その集中力を少しでも勉強に注げば・・・」

唯

「そう言うりっちゃんはどうだったのさ〜」

律

「んあ、私？」

田井中は・・・多分大丈夫だろう。

律

「じゃじゃ〜ん！この通りですよ！」

そこには89とデカデカと書かれた答案用紙が。まあ、当然だろう。何せ・・・

唯

「こ、こんなの・・・りっちゃんのキャラじゃないよ」

渡

「（平沢・・・少なくとも今のお前がそんな事言っても微塵も説得力はないぞ・・・）」

律

「おっほっほ〜。私くらいの人間になると何でもそつなくこなしちゃうのよ」

唯

「りっちゃんは私の仲間だって信じてたのに・・・」

律

「おっほっほっほ〜」

渡

「（そのブルジュワっぽい笑い方止める。癢に触る）」

漣

「テストの前日に泣きついてきたのは何処の誰だっけ？」

その途端に田井中から笑みが消えた。やっぱりな。秋山が田井中に教えでもしない限り、こんな高得点の可能性は高くない筈だ。

律

「ば、ばらすなよっ！」

そこへ横の椅子に座っていた平沢の手が田井中の肩に伸びて、

唯

「それでこそりっちゃんだよ！」

律

「赤点採ったやつに言われたくはねえ！」

唯

「ところで漣ちゃんとムギちゃんは何点だったの？」

律

「ああ、そうそう。渡も何点だったんだよ？」

渡

「見せたくねえ」

律

「ハハ〜ン。私に負けたのが悔しくて見せたくないのか」

渡

「悪いがお前には勝っているぞ・・・悔しい事に変わりはないがな」

律

「だったら早く見せろよ」

渡

「ったくしょうがねえな」

秋山と琴吹が渡したので俺も渋々答案を差し出す。

唯

「わあ〜！」

律

「ウゲツ！ま、まあ漣とムギはこれ位当然だとして・・・渡！おめえ97かよ。コレのどこが悔しいんだよ」

渡

「悔しいに決まってるだろ！こんな1時の項の係数の計算ミスって3点も引かれたんだぞ。これ会ってたら満点だったのに・・・」

律

「クソ〜ッ！今回のテストで勝ったら罰ゲームしてやろうと思ったのに〜」

渡

「残念だったな」

律

「クッッ！」

そして別の日。

唯

「失礼しました」

とここまで普通という言葉が似合う状況で普通に執務室を出て普通に部室に來た平沢。

唯

「ああ、今日は羊羹だね」

・・・だんだんこの部活の存在意義が分からなくなっていく気がする。そーいや追試の日取りは何時なんだ、と平沢に聞こうとしたら・

唯

「追試の人は合格点採るまで部活動禁止だって」

渡

「・・・は？」

澪 & 律 & 紬

[illegible]

コイツらのリアクションも少々オーバーだが、それも仕方のない今の平沢の発言。

零

「結構厳しいんだな」

律

「じゃあここにいるのも不味いんじゃない？」

唯

「大丈夫だよ。ここにはお菓子食べに来ているだけだから」

おい、今聞き捨てならない事を言つたよな。

律

「そっか。それなら安心……って何でやねん！」

・・・ かるうじて部長としての自覚はあるんだな。これで「安心だ」と言い切ったら即刻退部届をテーブルに叩きつけてたぞ。

零

「もしも唯がいなくなったら私達4人だけになっちゃうんだよ」

律

「えっ！？て事は・・・」

零

「部員数が足りなくなる」

律

「それで・・・廃部!？」

渡

「（いや、部活動は禁止でも所属している事に変わりはないから廃部はないと思うのだが・・・）」

紬

「追試は何時あるの？」

唯

「1週間後」

澪

「一週間後か・・・」

唯

「そんだけあれば毎日ここに来て大丈夫だよな」

数秒の間を置き、平沢以外がずっこけた（俺も含めて）。

渡

「呑気だな～お前」

律

「1週間しかないの!」

澪

「追試に受からないとこの部自体も無くなるかもしれないんだよ」

渡

「今回は本腰入れる」

唯

「・・・そうだよ。皆と部活続けたいから私、頑張る！」

頑張れよ。・・・最後まで。

その日の晩に「チャンピオン」の刺繍のシャツを着てやろうとしたものの、机が汚すぎてそっちに集中し、気付けば深夜になって勉強できなかったなんてやはり知れた事ではない。

時間は刻々と過ぎていく。1日1日が過ぎていく度に俺達の不安も募っていく。アイツはやれば出来そうなやつなんだがやらなそうだしなあ。以前真鍋からちよつとだけ話を聞いたが本当にアイツと関わると「大変」の2文字は外せそうにない。

取り敢えず各々アイツにメールを送ってやる事にしたのだが・・・俺アイツのメルアド知らねえ。

3人はちゃんとやったそうだが、特に田井中のは面白そうだったらしい（後日談）。

毎度毎度シャツの刺繍が変わっていたらしい。ロマンス、ラブハン、チャレンジ・・・何か共通点あるのか？

そして追試前日の朝、部室―

予想通りの事態が起きた。

唯

「という訳で澪ちゃん助けて〜!」

澪

「えっ!? 勉強してきたんじゃないの!?!」

唯

「出来なかった〜(泣)」

渡

「(出来なかったじゃなくてやらなかったの間違いじゃないのか?)」

「

紬

「合格点取れなかったら私達・・・」

唯

「それだけは絶対したくない!」

澪

「・・・よし、今晚特訓だ」

唯

「えっ、ホント!？」

律

「漣に教えてもらえば確実に合格点取れるぞ。漣上手いんだぞ」

漣

「いやゝ・・・(テレテレ)」

律

「一夜漬けで教えるのが」

漣

「うぉゝい!イメージ悪いな!普通に教えるよゝ(泣)」

かくして平沢の為の(一夜漬け?)勉強会が行われる事になった。

特訓！？

その日の帰り、平沢の家に行く事になった俺達。秋山が行くなら俺は必要ないんじゃないかと思ったが田井中によって同行させられる事になっちまった。やれやれ・・・

唯

「今日はお父さんが出張でね、母さんも付き添いだから気兼ねする事はないよ」

お前の両親は職場結婚か何かか。

両親か・・・そっぴゃ親父はどうしているかな。家にいると若干喧しい所はあるがここまでいないと偶には会いたくなるものだな。

（因みにだが俺の親父は海外、それも戦地や避難民の為の活動をしている。分野は様々で食料提供や井戸掘りなどだ。日本こゝにいるとつい当たり前のように感じるが、向こうは普通に水を飲むことすら容易ではないのだ。つくづく日本という国が安全な所であるか問う所かという事を認識させられる）

律

「あれっ、そっぴゃ妹がいなかったっけ？」

唯

「うん。妹は帰ってきていると思う」

紬

「じゃあ私達が来たら迷惑なんじゃないかしら？」

平沢の妹な。何か・・・コイツと一緒に部屋でゴロゴロしている様子が目に浮かぶどころか具現化しそうなんだよな。秋山も田井中も琴吹も多分同じ事を考えているだろう。

律

「全然大丈夫なんじゃない？」

・・・あるいはな・・・

そして平沢の家に到着。

唯

「皆、上がって上がって」

4人

「お邪魔します」

唯

「ただいま」

？

「おかえり・・・あれ、お姉ちゃんお友達？」

唯

「うん」

？

「初めまして。妹の憂です。姉がいつもお世話になってます」

・・・おい、今日の前で馬鹿丁寧に挨拶したのが平沢の妹か。イメージと正反対だぞ。確かに顔が凄く似ている。双子と間違えられても無理は無いかもしれない。唯一の確認方法は声の違いだろうか。

憂

「皆さんスリッパをどうぞ」

澪&律&紬&渡

「（出来た子だ〜！！）」

取り敢えず2階。平沢の部屋ー

律

「いや〜、姉妹でこうも違うもんかね〜」

唯

「ふえ？」

律

「妹さんに唯のいい所全部吸い取られたんじゃないの？」

若干言いすぎかもしれないが、俺もそう思う。普段どこか、のなりくらしとしている平沢に対して妹は非常に礼儀正しい。多分あの彰って奴にも引けを取らないだろう。

唯

「りっちゃん酷い！」

そこへ、平沢妹がお盆に湯のみとお茶と和菓子をお盆にのせて部屋に入ってきた。

憂

「あの皆さん、よかつたらお茶どうぞ。買い置きのお菓子で申し訳ないんですけど・・・」

4人

「（本当に出来た子だ！！！！！！）」

律

「憂ちゃんは今年生？」

憂

「中3です」

律

「あはっ、1つ違いじゃん」

渡

「てつきり双子かと思ったぞ。髪形と声以外瓜二つだからな」

憂

「似てるってよく言われます・・・」

渡

「（まあ、容姿だけだったらな）」

紬
「受験生なのね」

澪
「何処受けるかもう決めてる？」

憂
「えっと・・・出来れば桜ヶ丘に行きたいんですけど、私の学力で受かるかどうか・・・」

律
「お姉ちゃんが受かったんだから大丈夫だよ」

澪
「お姉ちゃんに勉強教えてもらったらいいんじゃない？」

憂
「ええっと、それは・・・自分で頑張ります」

律
「だってさ」

唯
「ええ～！何で～！」

ここまで妹にあてにされない姉というのも珍しいものだな。

憂

「で、でも、お姉ちゃんはやれば出来る人です！」

4人

「（やっぱり出来た子だ〜！！！！！！）」

お前ら、生まれてくる順番間違えたんじゃないの？

さて、感激タイムはそこまで。平沢の為の勉強会が始まったのだが・
・

メインで教えているのは秋山。琴吹と俺はそのサポート。どうも俺は自分が学習するのはまあ大丈夫でも、誰かに教えるのはそう得意ではないようだ。田井中は・・・何もしてない。いや、何もしてないならそれはそれでそのままジツとしていて欲しかったのだが、アイツの性格を考えるとジツとしている事は、それ以外の何を要求するより至難の事だ。

平沢の椅子でグルグル回ったり、本棚漁って漫画を読みふけったり、ベットの上でゴロゴロしてたり。

結局秋山からデカイ拳骨をくらい、正座で部屋の隅に座らされた。そこまでならまだ許容範囲ストレスだったが、同様に正座していた平沢の痺れていた足の平を突ついたので、平沢が過剰に反応。とうとう秋山の堪忍袋の緒が切れ、部屋から追い出された。まあ、自業自得ってやつだな。

時計が4時半を過ぎた頃、

唯

「駄目だ。集中力が続かない（泣）」

とテーブルに突っ伏しやがった。

漣

「おいおい、初めてまだ30分しか経ってないぞ」

渡

「（何か真鍋の苦労が身に染みて分かる気がする・・・）」

と、そこへ、

紬

「唯ちゃん、ケーキ持ってきたから後で皆で食べましょ。だからもう少し頑張って」

その途端に平沢がムックと体を起こし、物凄いスピードで問題を解き始めた。

漣

「流石ムギ・・・（汗）」

渡

「に、人間業じゃねえ・・・」

というか琴吹、そのケーキ、どこから持ってきた。学校から平沢の家まで来る途中で寄り道はしなかったからまさか部室から！？だとしたら傷んでいるんじゃないのか、と言いたかったが折角の努力を無にしてしまうのも何だと思って言い止めた。

さて、一方の田井中はと言うと・・・

どうやって部屋に戻ろうかを考えていたらしい。普通に入って、静かにしていればそれでいいんだけどよ。

律

「おゝ、皆やつとるかねゝ」

無視。

律

「いえゝい！私だよん♪」

無視。

で、また外に出たかと思ったら今度はドアを勢いよく開けて閉まりつつあるゲートを間一髪で潜り抜ける様な動作をしゃがった。ドアが壊れるぞ。それに素朴に近付いた秋山が、

「喧しい！」

と拳骨入れた。いやあ、痛そうだぜ。

小休止。ケーキを食べてる平沢と田井中の表情は満足感そのもの。

唯

「おいひ」

律

「この為に生きてるって感じだな」

澪

「この子達の人生って一体・・・」

渡

「何かコイツらがニートになるって予言されたら否定できそうにな
いな・・・」

そしたら平沢が、

唯

「はっ！部活やっててもニート！？」

下でインターホンが鳴った。平沢妹が応対している。まさか・・・

その人物が部屋に入って予想は確実なものとなった。

？

「どう、捗ってる？」

真鍋和。どうやら平沢の幼稚園の頃からの幼馴染らしい。幼馴染でも時が経てばこうも違くなるものかねえ。

唯

「うん。御蔭様で」

和

「皆さんが軽音部の？」

唯

「あつ、紹介するね。秋山澪ちゃんに、田井中律ちゃん、こっちが琴吹紬ちゃん」

澪&律&紬

「宜しく」

和

「真鍋和です。唯とは家が近所で幼馴染で高校でも同じクラスになりました」

唯

「幼稚園の時から殆ど一緒なんだよ」

和

「不思議な縁よね。あつ、それよりサンドイッチ作って来たわよ」

唯

「おお！丁度おなか減ってたところ」

澪

「今ケーキ食べてたじゃん」

律

「全っ然オツケー。出して出して。ごっつあんです」

渡

「カロリーを気にしろよ」

本当だったら太るぞと言っても良かったのだが、万が一この中で体質を気にしている様なやつがいた場合にどんな仕打ちを受ける事になるか分かったもんじゃない。

和

「中学生の時、私が熱出して暫く寝込んでいたんだけど、唯が毎日プリントを持ってきてくれてたの」

唯

「私風邪ひいた事ないからね」

渡

「（それは妹さんによる健康管理がなっているのか、それとも何とかは風邪をひかないっていう類のものなのか・・・）」

和

「でもその中に唯のテストが間違って入っていた事もあったわ」

4人

「あははは・・・」

漣

「それだったら律も・・・渡、覚えているか」

渡

「ん？・・・！ああ、あの事ね」

律

「わわあゝ！ばらすなよ！」

漣

「実は律ってば・・・」

その後は過去の話で皆大爆笑した。

そして時計が8時を回った頃、

和

「ところで、勉強大丈夫なの？」

一斉に笑いが消え、同時に冷や汗が覆った。

再び勉強モードへと姿勢を変える。

秋山の指導のもと順調に事が進んでいるかと思いきや、だんだん平沢がウトウトしだした。

渡

「おい平沢。寝るな！」

と目を覚ましたと思ったら田井中の方を向いて

唯

「りっちゃん隊員」

とか意味不明な事を呟いた。・・・完全に寝てたな。

そして時計は既に10時半を回っていた。後で振り返ってみるとよく頑張ったなっと思う。平沢も秋山も琴吹も。・・・田井中も。

そして平沢一人の力で何とかある程度の問題を解けるようになって漸く帰る事になった。

あれ、そっぴや田井中は何処に行ったんだ？さっきから妙に静かすぎと思ったが・・・

・・・道理で静かだった訳だよ。下の階で平沢妹とゲームしてたんだからな。

律

「クッッ！また負けた」

漣&渡

「（またって・・・）」

そして追試当日の部屋―

秋山はさっきから部屋の中を行ったり来たりしてるし、琴吹はお茶を器から溢れさせるし。田井中は・・・のんびり過ぎるのも問題だが今はどちらかと言うと緊張を持たずにガンと構えて待っているべきだと思う。

漣

「唯、ちゃんとやってるかな？」

律

「大丈夫なんじゃない」

漣

「もっと心配しろ！（怒）」

渡

「秋山は心配し過ぎだ」

漣

「渡まで！」

渡

「昨日見て分かったんだけどな、平沢は本当に「やった事は出来る」やつだ。だからもしかしたら合格点どころか……」

そしてまた数日後――

漣

「今日返却日だよな……大丈夫かな……」

紬

「あれだけしつかりやったんだから大丈夫よ」

と、そこへ本人が入ってきた。

なんつつか、そのステータスは同じ表現で悪いが、魂ここに在らずって感じだった。

まさかとは思うがな．．．

唯

「どろどろ、どうしようもありません……」

零

「えっ！？また駄目だったの！？」

唯

「アワフワフワ……ひゃ、ひゃ、ひゃ、ひゃ、百点取っちゃった」

渡

「マジかよ！」

零

「極端な子！」

まあ、何にせよ。波を一つ越えたって事だな。

紬

「じゃあ早速練習しましょう」

零

「試験勉強中もコードの練習してたくらいだし」

唯

「えへへ。XでもYでも何でもござれ」

・・・はあ。

秋山が俺達の顔を順番に伺っている。琴吹も田井中も首を横に振った。

漣

「じゃあC、Am7、Bm7、G7を弾いてみて」

唯

「ほいほい・・・」

と颯爽とギターを構えた平沢だったのだが・・・
そのまま指が動かない。

漣

「どうしたの？」

唯

「・・・・・・忘れた」

渡

「こけし人形みたいな顔で堂々と言っな！」

4人ともずっこけた。無理もねえ事だろ。また最初からやらなきゃならないのかよ。

しかも4人とも俺に視線が入っているし。俺が指導しろってか。全く左右逆だと、教える側も教わる側も苦労するもんだなあ・・・

♪ }
♪ }
♪ }
♪ }

渡

「何でチャル●ラだけはちゃんと弾けるんだよ」

特訓！？（後書き）

どうも。3話終了です。

さて次回ですが、1話か2話、オリストをやってから4話「合宿！」に行こうと思います。

感想をお願いします。アンケートもお願いします。

渡

「その馴れ馴れしい態度が読者の皆さんを怒らせている事に気付けた！」

そんな事言われてもね〜・・・

では！

再会と出会い（前書き）

今回はまた彰が出てきます。

その場所は・・・

本編で！どうぞ。

再会と出会い

中間試験と平沢の追試が一段落して、その週の日曜日。

ギターを演奏してみると、どうも調子が悪い。弦はついこの前はリ替えたばかりだから問題なかったのだが、よく見るとネックが反り過ぎている。・・・仕方ない、修理に出すか。

俺が知っている楽器店で家から少し遠いが在庫豊富で何よりギター直し専門のやつがいるらしい。となれば善は急げだ。

琴吹が通学に使っているという電車で約50分。入学式以来、家の周り以外の所はあまり行つてなかったからこの辺に来るのも久し振りにという訳だ。

渡

「それにしてもここは相変わらずでけえなあ」

俺の目的地の楽器店は、大きい店が立ち並ぶこの一角の中でも、ひとときわその存在感がある。なにせ全6階。1階がアコースティック、2階がエレキギター、3階が機材類、4階がドラム、5階がベース、6階がキーボード。何でもこんなデカイ店を現在の店主1代で此処までにしたという（しかもその店主もまだ若い人らしい。風の便りでは30代前半だとか）。

店員

「いらっしゃいませ」

それにしてもどうして俺の周辺には礼儀正しい奴がポコポコっているんだ。あの彰ってやつもしかり、平沢妹もしかり、此処の店員もしかり。

そして用のある二階への階段を登る。

店員

「いらつしゃいませ」

それにしたって凄い数のギターだ。恐らく万人が何処かの楽器店に行ってもそういう風を感じるだろうが此処はそれ以上だ。何処から此処まで品数を揃える予算やら何やらが出ているんだか。

渡

「すみません」

？

「はい」

と店の奥から出てきたのは正に30代前半の男性。もしかしてこの人が噂に聞くこの店の店長なのだろうか。

？

「お客様、如何いたしましたか？」

渡

「あ、あの、店長さん？」

？

「はい、左様ですが」

ホントかよ。若いな。

店長

「それで、御用件は？」

渡

「あ・・・このギターのメンテナンスをお願いします」

店長

「はい、分かりました。・・・彰」

渡

「！？」

彰だつて！？まさか、あの時偶然病院であつたアイツじゃないよな。ハハハ・・・まさか。彰なんて別に珍しい名前でもないし探せばいくらだつて出てくる・・・

？

「は、い」

おい、この声。まさか本当に・・・

店長

「このギターのメンテナンスを頼む」

彰

「うん、分かった。・・・あつ」

奥から出てきたやつ。ほんの一瞬とはいえ自分の視覚を疑った。だつて・・・だつていくらなんでも偶然が過ぎるだろ。あの時本当に偶然知り合ったちよつと気の弱そうなやつが何でこんな所で、しかもバイトみたいな立ち位置ボジションにいるわけ？

店長

「彰、どうかしたか？」

彰

「えっ、・・・ううん、何でもないよ。じゃあやってくるから」

向こうも驚いているな。無理もない事だ。つい数週間前に会った人とまた意外な所で会うなんて予想が出来たらそれは凄いもんだが現実には予知能力でも持っていない限りほぼ不可能だろうからな。

店長

「修理に30分程かかると思いますのでこちらの札を持ってお待ち下さい」

と、よくレンタルDVD屋やファーストフードで注文の品を待つてもらった時に渡される札を渡された。

さてと、その間暇だし少しブラブラしていようか・・・と辺りを見回していたら、英検の問題集が目に入った。そういやもうすぐだな。リスニングは何時もi podでそのレベルのものを聞いているから耳慣らしは短時間で済ませられるとして・・・筆記はやっておかないとな。前は油断し過ぎて2級落ちてしまったし。だが2級はセンターレベルと言われているモノ。容易ではないのはそれだけでも十分言い表せているだろう。

かくして何冊か買いそびれていたラノベを買ってから楽器店に戻る。2階に登ったらさっきの店長さんはいなかった。どうやら別の階で他の客の応対をしているらしい。仕事熱心で結構な事だな。

渡

「すいませ〜ん。先程メンテナンスを頼んだ者ですが」

そしたら奥の方から

「はい」

とやっぱりアイツの声がした。

彰

「お待ちせしました。こちらですが少々ネックの剃りが大きかったんでそれを少し矯正しましたが、如何でしょうか？」

アイツが持ってきた俺のギター。今度は視覚のみならずこの現状を疑いたくなった。俺のギターが買った当時と変わらない位の新品さを醸し出している。

渡

「これ、お前がやったのか？」

彰

「はい・・・あの、何か不備がございましたでしょうか？」

渡

「いや・・・そう訳じゃないんだが・・・ああ、会計は？」

彰

「5000円でございます」

渡

「（コイツ自分の腕を過小評価し過ぎなんじゃないか？あるいは店でこの価格が決まっているとか？）」

俺はそう心中で思いつつも野口英世を6枚出した。

彰

「あの・・・5000円ですけど・・・」

渡

「コイツはとつときな」

彰

「そついう事は出来ません」

渡

「硬い事言つなよ。知り合いつていう名目でな」

彰

「・・・・・・・・」

渡

「ありがとよ、俺の相棒ギター直してくれて。じゃあな」

彰

「あ、ありがとうございました・・・」

ふとした事から再開した俺等。運命っていうのは摩訶不思議なものだよなあ。俺と彰アイツの因果の交差路というものがまた幾度か交わり、そしてそう遠くない未来で同じ道を同じ目線で進む事になるなんて、この時には誰ひとり想像も出来なかっただろうさ。

久し振りに来たもんだからちょっとのつもりで幾つか店まわってた。何時の間にか時間がかなり経ちまっていた。ついこの前、平沢のギターを買う時に呆れているポジションにいた訳だが今回はミイラ取りがミイラになる、まさにあの時の秋山のポジションにいた訳か。まあ・・・偶にはいつか。こういう時に連れがいたら迷惑かけちゃったかと思うかもしれないが、今は俺一人だからある意味足任せで訳だ。

っても流石にそろそろ帰らないとって感じの時間になってきたので、電車に乗り込んで行きで入った駅で降りる。空は橙色から夜一色に変わる下準備をしている。まったく、時間ていうのは人が何かに熱中している時にその隙を狙って少し速度をあげているんじゃないのか。

楽しいひと時はあつと言う間。嵐の前の静かさと言う儚く脆いもの。
・ ・ ・ 今の俺にこれから振りかかろうとしている嵐なんてな ・ ・ ・

？

「や、止めて下さい！」

まったく誰だよ。人がものの想いにふけっている時に雰囲気ぶち壊しやがって。

？

「は、放して下さい！」

おいちよつと待て。今すぐくやばい状況のような台詞が聞こえたんだが。

？

「まあ、そう言うなって」

声のする方へ行ってみればニット帽を被って背中かはみ出た刺青、何より雰囲気で不良と分かる奴が中学生（？）位の女子に絡んでいる。

ざけんな。テメエのせいでこの俺の心境ぶち壊されたのかよ。何発か殴らねえと気がすまねえな。

？

「好い加減にして下さい！これ以上付きまとうと人呼びますよ！」

？

「へっ、呼べるもんなら呼んでみやがれ。どうせ誰も来やしな」お呼びかよ」ッ！？」

その見た目。どう見ても誘拐する気マンマンだったようだな。

？

「へっ、何だよカツコつけちゃって兄ちゃんさ。今大事な話してんだよアッチ行つててくんないかな」

渡

「状況から察するにどう解釈してもそうには見えないんだけどよ」

？

「うるっせえな。ガキはすっこんでろ！」

チンピラがあの女子を突き放して俺に向かってきた。勢いで拳構えてやがる。

渡

「喧嘩する相手は選べっての」

俺はその場から動かず、その拳を真正面から左手だけで受け止めた。

？

「んなつ！？」

こんな程度かよ。とはいえ、流石にギター背負っているんじゃない動き辛い。アイツはもう逃げたか・・・と遠くを見たら震えてその場にかたまっていやがる。何やってんだ、と叫びたかったが丁度いい。終わるまで荷物を預かってもらうか。

？

「よそ見するとは、余裕だなあ！」

何処の誰の台詞だよ、それ。何か探せば色々見つかりそうな気がするんですけど。

それにしてもこのチンピラ。行動がワンパターン。分かっちゃえばこっちのペースで行動する事何ぞ無難だ。

で、あの女子中学生（？）の所まで辿り着く。

渡

「悪い、ちょっと持ってきてくれ」

？

「あ、あの・・・」

ガタガタ震えている。何しろ自分が誘拐されそうになったんだからな。無理もないだろう。

渡

「心配すんな。すぐ終わらせてやるよ」

肩にそつと手を置いてやった。それで幾分かは落ち着いた様だ。

？

「お喋りはその位でいいか？」

つたくしつこいねえ。

渡

「ああ、十分だよ。すぐ終わらせてやるから」

？

「ホントにムカつく野郎だぜ。それでもそんな事が言えんのか」

何だ、何しでかすのかと思ったらナイフなんて出してきた。つたく・・・この世の何よりも救いようがねえ奴だな。

渡

「そんなもん持って俺を殺せるとか思っているなら思い上りも程々にしとけ」

？

「しゃらくせえ〜〜〜〜！！！」

ナイフを持っても相変わらず行動はワンパターン。つまらねえ。

突き出してきたナイフをよけ、その手をねじり上げ背中に肘打ちをしてあっけなく勝負ありだ。ちつとも面白くねえ。一方通行（アクセラ・ータ）じゃないがそんなだったら最初^{ハナ}っからこんなことしてんじゃねえよ。

渡

「おい」

不良の背中を踏みつけながら若干悪い顔をしながら俺は口を開く。

渡

「今から3つ数えるうちに此処から引きあげるっていつなら今回は見逃してやるよ。さあ、どうする？」

実は右手を後ろに回して携帯を取り出していた。

1・・・

渡

「3・・・」

1・・・

渡

「2・・・」

9・・・

渡

「1・・・」

？

「ひっ！」

何だよその逃げ様はよ。俺は怯えて逃げようとする不良の背後左脇腹を思いつきり蹴りつけた。

？

「グワッ！」

いいねえその恐怖におののく表情。かおもうちょっと見たいのは山々だけど、時間が時間だしあの子をいつまでも放っておくわけにもいかないかな。

渡

「生憎だよねえ、俺がテメエみたいな危なっかしい奴を野放しにすると思っただ？」

その後、携帯で警察呼んでそのチンピラは殺人未遂及び誘拐の容疑で現行犯逮捕。いやぁ良い事をした後って清々しいよね。

怯えがまだ続いていた様だ。

渡

「大丈夫か？」

？

「は、はい・・・あ、あの・・・ありがとうございます」

何かよく見たら俺の事を見て震えている様にも見えた。さっきのあの表情を見れば女の子だったら誰でも怖がるか。

渡

「怖い思いさせちまったか？だとしたらゴメンな。アレ生まれつきでさ、中々直らなくて自分でも困っているんだよな」

？

「そ、そうなんですか・・・あつ、ギターお返しします」

渡

「ん、んああ・・・」

ギターを受け取るまでの正にその瞬間まではそれで終わりだと思っていた。だが、

渡

「!？」

？

「あの・・・どうかしたんですか？」

受け取った瞬間のこの娘の手の感触。ほんの一瞬触れあっただけがそれでもはつきりと分かる。

渡

「なあ、ひよつとしてお前もギターかベースとかやっているのか？」

？

「え、あ・・・まあ・・・」

渡

「そつか・・・まつ、機会があつたらまた会おうぜ。お前も早目に帰れよ」

？

「はっ、はい！あの・・・本当にありがとうございました！」

俺は手だけで答えた。

再会した彰と、帰り際に偶然助けた一人の少女。それが・・・運命が互いを引き寄せあい、より深い関係になろうとしていたなんて事は家に向かって無心に歩くその時の俺には考えもしてなかっただろう。

再会と出会い（後書き）

また長くなった・・・自分の分才の無さを感じます。

渡が帰り際に助けた少女って誰だかお分かりですよね？

次回、予定通りもう1話オリストを書いて「合宿！」に行きます。

感想を是非是非送って下さい。皆さん視点でのこの作品を知りたいです。

では。

英検！（前書き）

タイトル下らねえと思った人少なからずいると思います。

少し前にYOUTUBEで「えいけん！」何て動画を見た事がある
様なない様な・・・

では、どうぞ！

英検！

唯

「最近ワつくんあんまり部活来てないね」

漣

「そう言えばそうだな」

律

「やる気がないのか、たるんでる！」

漣

「お茶飲みながら言っても説得力無いぞ」

律

「うつ・・・」

漣

「唯、渡に明日聞いてみてくれないか」

唯

「うん、分かった」

翌日、唯は珍しく早目に来て渡を待っていたのだが、その本人が来たのはホームルーム直前だった。

結局4時間目まで聞き出せず昼休みになった。

唯

「ねえワっくん」

渡

「何だ？」

唯

「最近部活来てないよね」

渡

「まあな」

唯

「何で？何か用事とかあるの？」

渡

「別に用事って訳じゃない。ただ、2週間後にこれがあるからな・
・」

そして放課後―

澪

「唯、渡何て言ってた？」

幾分が不安そうに尋ねる。

唯

「えっとね、何か英検っていうのを受ける準備をしているらしいんだよ」

律

「英検だって!？」

紬

「そう言えばもうそんな時期なのね」

澪

「そっか。だから渡「そんな事がよ!」なっ!・・・」

律

「そんな事の為に部活サボっていたのかよ。唯の練習相手の役をほっぽり出して自分の勉強の為って・・・」

澪

「そう言っなよ律。英検とかの級検定は年中やっているわけじゃないんだし、渡が受けようとしている2級だって簡単じゃないんだしさ」

唯

「簡単じゃないってどの位？」

澪

「一般的に英検2級のリスニングはセンターと同レベルって言われているんだよ」

唯

「へー！ワつくんそんなの受けるんだ」

澪

「・・・ただ、事情があるにしても、ちょっと一言誰かに声かけといて欲しかったな」

紬

「確かにそうね」

澪

「唯・・・渡の携帯番号知っているか？」

唯

「うん、一応メルアドと一緒に交換したから知っているけど・・・」

澪

「私に教えてくれないか。唯だと何て言ったらわからないだろうし、律はあの調子だし。今の渡に話をするなら多分私が1番適任だろ」

唯

「・・・うん、分かった」

渡視点―

その日の午後7時。晩飯の時間だ。

相変わらず一人か。まあ、殺風景な場所よりは格段にマシだけどな。
今夜はちよつと凝ってロールキャベツ。これ美味しいんだよね。

・・・と食事を楽しんでいたら偶々ポケットに突っ込んでいた携帯が
震えだした。・・・誰だ？

渡

「・・・もしもし？」

漣

「・・・今ちよつと話せるか？」

渡

「秋山か・・・大方用件は部活についてだろう？何も言ってなかった事は謝る。こっちも少し切羽詰まってさ。田井中は少し怒ってたりしてな」

漣

「よく分かったな」

渡

「で、仲介役として秋山が電話してきたと」

漣

「まあ、そんなト」

渡

「実質あと2週間で1次があるからな。それに受ければ2次は少し余裕が出来るんだが、それまではどうしてもな。とはいえやっぱり一言声をかけておくべきだったな」

漣

「・・・・・・」

渡

「1次が終わったからお詫びに何か奢ってやってもいいぞ。俺の家誰もいない事が結構あるし」

漣

「なっ！なななななななな、何言っているんだよ急に！」

渡

「そんなに驚く様な事か？」

漣

「だっ、だって、それは・・・その・・・」

渡

「何だったら田井中には1つ言う事聞いてやってもいいって伝えても構わない」

澪

「!!!!!!」

渡

「ただし・・・『名前で呼ぶ事』・・・以外でな。じゃ」

と一方的に切った。少し後味が悪かったが、これ以上やると長引いて折角のロールキャベツが冷えて不味くなってしまう。

というか今更ながら気付いたが何で秋山が俺の携帯番号知っている？考えられる理由はただ一つ。平沢が教えた、それ以外考えられない。何せ俺が高校で携帯教えたのは平沢だけなんだからな。

だがそんな心配ごとは1次が終わってからでも遅くはないだろう。ロールキャベツの肉汁を味わいつつご飯を頬張って晩飯終了。その直後に食器洗い。正直面倒臭いがしょうがない。家に一人きりというのはメリットもデメリットも大きいのである。だが食器洗いはキチンとしないと衛生面をはじめとする色々な問題が生じる。

手が痛い。冬よりはマシだがまだ水が冷たい。主婦が垢切れとかで

悩む理由が少し分かる気がする。

つと、そんな事を考えている場合ではない。そろそろ問題にとりかからないと。これは英検全般に言える事だが、文章の役が大体分かっていても1つの単語が分からないから訳せない、しかもその1語がその文章の重要語だったりする。筆記の間は辞書は手放せないのである。

画して2週間が経ち、今日は英検1次試験当日。会場が桜ヶ丘で良かった。どの試験においてもそうだが試験会場が自分の知っている所だと精神的に余裕が持てるものである。

2級の会場は3年生の教室。2年後には此処にいるのか。その時になつたらきつとこの日を瞬きの間とか思つて回想でもするんだろうか。

俺はこの試験会場に来る度に思う事がある。それは本当に色んな年代の人が受けにくるという事だ。俺等の様な中高生もいれば、大学生、もしかしたら社会人と思える様な人、あるいは逆にまだ小学生にもなっていないんじゃないかと思えるくらい小さな子だったり。もしかして帰国子女か？何れにせよ俺は自分の力で今の試験を突破するだけ。前回の雪辱を晴らしてやるぜ。

筆記が終了、リスニングの準備に入る。感触は前回とは全く違う。恐らくいけるんじゃないだろうか。
2級以降のリスニングは各設問で放送が1回しか流れない為、聞き逃すと致命的だ。

・・・よし、イケル！聞き辛い所もちゃんと聞きとれた。やはり最後は努力が功をなすんだな。

試験終了。うん、感触は悪くない。恐らく合格は出来る！

校門を出ると、

渡 「あっ……」

漣 「お、お疲れ様……」

秋山がいた。否、待っていたと言った方が正確かもしれない。

渡 「もしかして待っていてくれたのか？」

漣 「そ、そんなんじゃない！ただ……渡の試験が上手くいったかな
って……／＼／＼」

渡 「何で若干顔が赤いんだ？」

漣 「あ、赤くなんかない！」

渡 「はいはい。ついでだ、待っていてくれたお礼に何か奢ってやるよ」

漣 「えっ、そ、そんな悪いよ……」

渡 「遠慮するな」

近くにあるファーストフードで一旦腰を落ち着かせる。秋山は道中で一部始終恥ずかしそうにしていた。コイツの男が苦手っていうのは変わりがない様だ。俺だって例外じゃない。

アイスコーヒーを2つ頼んで2階の目立たない席に座る。

渡

「はぁ・・・」

漣

「お疲れ様」

渡

「まあ、一段落ってトコだな。これで合格してれば2次は毎日暫く部室に来れないなんて事はなくなるからな」

漣

「そうか・・・」

渡

「・・・・・・・・迷惑かけちゃったか？それとも心配かけたか？」

漣

「まあ、ちよつと心配だったかな」

渡

「事前に連絡しなかったのはやっぱり謝る。そりゃあいきなり来なくなったら不安にもなるだろうからな。ただ、前回の結果があまりに酷かったからそれを挽回したくてね」

漣

「それはもう聞いたよ。事情があつたのはもう分かったから。ただ、これからは気を付けてくれよ」

渡

「ああ・・・あつ、そうだ。1つ聞きたい事があるんだが」

渡が突然真顔になつたので漣は一瞬怯んだ。

漣

「な、何だよ／＼／」

渡

「先ず、何でまた顔が赤くなっているんだ？」

漣

「！！だから、赤くなんかなってない！私の事からかっているのか！」

渡

「別にからかっているわけじゃねえよ。熱でもあんのかと」

漣

「・・・別に熱なんかない・・・」

渡

「そんならいいんだけどよ・・・で、ここからが本題。秋山、お前に俺の携帯教えたのは平沢だよな？」

漣

「うえ！？・・・うん、唯だけど」

渡

「まったく、アイツは。必要になったら俺が自分で教えるから誰にも教えるなって言っておいたのに」

漣

「わ、私は自分から教えてくれっていったんだけど・・・」

渡

「それで平沢教えたのかよ!？」

漣

「う、うん。渡が全然連絡内からどうしたのかわかって思っ……」

本当だったららはわたが煮えくりかえっている状態だったが今回は渡自身にも非があった為、こっちの話においては強く出れない。

渡

「ハァ」。まあ、教えちまった事はしょうがないか」

漣

「ゴメン。何だったら私の教えようか？」

渡

「……そうだな。秋山とは電話で話す事がこれから多くなりそうだし」

かくして秋山の携帯の番号とメルアドを教えてもらい、お互いアイスコーヒーを飲みほして外に出る。

渡

「ッ！」

俺の直感が警鐘を鳴らしていた。そう遠くない時間^{とき}に何かが起きると。それは俺がギターを直してもらった日の帰り道の時の空気と一緒だった。

漣

「じゃあ、また明日な」

渡

「・・・送って行ってやるよ」

漣

「そ、そこまでしてもらわなくていいよ／／／／／」

渡

「この前・・・」

漣

「えっ？」

渡

「いや、1ヶ月くらい前にギターのメンテナンスをしてその帰り道に、お前と同じ位の女子学生が俺の目の前で誘拐されそうになった」

漣

「そ、そんな・・・」

秋山の顔上半分が青ざめている。

渡

「そんな時は俺が助けたから何とかなっただけだな。でも、お前にはそんな目に遭って欲しくないんだ」

漣

「そ、そんな事があつたのか・・・う、うん。じ、じゃあ・・・途中でまで一緒に来てもらえるか」

渡

「ああ。もとより途中まで道は同じだからな」

帰り道、オレンジと紫が彩る空。何か出てきてもおかしくはなさそうだが、とか口に出そうとすれば出せたのだが秋山が（絶対に）塞ぎ込むからあえて喉にひっかけといた。会話は全くない。やっぱり秋山の男苦手意識つてのは健在だそうだが。悪いとは言わないがそれゆえ俺も少し話しかけ辛い。

秋山の自宅前。

漣

「結局最後まで付き添ってもらっちゃったな」

渡 「気にすんなよ。へえ、懐かしいな。小学生の頃に1回来て以来か」

漣 「そう言えばそうだな。あの時の渡が……今ここまで成長しているなんてな」

渡 「今の間は何だよ？」

漣 「……………// // //」

渡 「……ああ、その、もう遅くなるから行くな」

漣 「うん、じゃあまた明日な」

渡 「ああ」

玄関で別れて家に戻ろうとすると、

漣 「渡！」

と呼び止められた。

渡

「ん？」

澪

「その・・・英検受かっているといいな」

その励みに応える様、俺は笑顔で

渡

「きつと受かっているさ」

と答えた。

そして後日、1次を無事突破し、その勢いで2次も通過。俺は英検2級を取得したのである。

英検！（後書き）

終わった。

渡

「お疲れさん」

いやいや、渡こそお疲れ様。

彰

「お疲れ様です」

さて、そろそろ「ASD」を書くかな。

彰

「早目にして下さいよ」

うーん、じゃあ次は彰と梓をちょっとだけ接近させようかな？

渡

「早くしてくれ」

という訳でオリスト終了。次話は「ASD」を書くまでやらないと思っので暫く開くと思います。申し訳ありません。

彰

「感想等お待ちしております」

では。

合宿！？（前書き）

というわけで合宿編に入ります。

今回はオリストもいれて少し長くなるため、2回では終わらないと思います。

では、どうぞ！

合宿！？

英検が終わり、再び部室に戻った俺。田井中から少し小言をくらったが、普通にスルーして今は平沢のギターの指導にあたっている。一番に感じるのは、やはり左右逆だと教える方も教わる方も大変だという事である。

というよりそれ以前に・・・

Fコードを押さえている平沢。その状態を維持する事すらままならないのか、ゲキリ、と凄い音がした。

唯

「ゆ、指・・・（涙）」

律

「本当に忘れたんだな」

渡

「少しは自主練とかしろよ」

唯

「えへへ。おばあちゃんによく褒められたんだ。唯は1つの事覚えると、他の事は全部忘れちゃって」

律

「それ、多分違うぞ」

渡

「自分で言っただけで悲しくないのか？」

そこへ、

バン！！

と勢い良くドアを開けて秋山が入ってきた。

唯

「あつ、澪ちゃん」

律

「遅いぞ。何処行つてたんだ？」

秋山はテーブルの所まで行っただけだと思っただけで咄嗟に振り向き、

澪

「合宿をします！」

と高々と宣言した。

事のきっかけは数週間前、丁度俺が英検の筆記対策をやっていた頃。カメラを片手に学校の色々な場所を撮影していた秋山。柵に引っ掛かっている（どう考えても誰かが意図的にやったとは思えないが）

上履き、教壇に立てられた白いチョーク、障害物競争のタイムを計っている陸上部。そして部室をレンズ越しに覗いていた時、琴吹のティーセットが入っている食器棚の上に軽音部とマジックで書かれた段ボール箱を発見した。その中身は当時のバンド系統の雑誌やラジカセの他に「桜高祭」とラベルが貼られたカセットテープがあった。

時を戻して現在―

唯

「合宿？」

澪

「そう。もうすぐ夏休みだし」

律

「もしかして海？それとも山とか？」

澪

「遊びに行くんじゃないですね。バンドの強化合宿。朝から晩までみっちり練習するの！」

今の一言も録音しとけばよかったな。

そして予想はしていたが合宿と聞いて平沢と田井中はテンションが

上がりまくっていた。・・・別の方向に。

唯

「わぁ！着て行く服買わなきゃ」

律

「水着も買わないとな」

漣

「聞け〜！！」

渡

「何かアイツらの中じゃ海に行くことが決定しているみたいだな」

漣

「夏休みが終わったらもうすぐ学園祭でしょ」

律

「学園祭・・・」

漣

「そう！桜高祭のライブって言ったら昔は結構有名だったんだぞ。それなの、に・・・」

秋山が熱心に話をしているにも拘らず、どうしてこの二人は話を変な方向に持って行くんだろうなあ。

律

「学園祭・・・」

唯

「高校の学園祭って凄いでしょ」

律

「模擬店！」

唯

「焼きそば！」

律

「たこ焼き！」

はあ、どんどん話がずれていく。

律

「はいはい！私、メイド喫茶がやりたい！」

唯

「えゝ！お化け屋敷がいいよ！」

律

「メイド喫茶！」

唯

「お化け屋敷！」

律

「メイド喫茶！」

唯

「お化け屋敷！」

律

「もう！絶対お化け屋敷の方がいい・・・」

お前ら、話を脱線させるのも程々にしろ。でないとそろそろ秋山のイライラが爆発して・・・

ゴチン！！！！

凄い。田井中の頭にメツチャでかいタンコブが出来た。漫画でしか見た事なかったのにな。しかもドラムのシンバルがかなり揺れてたぞ。凄いバカ力だ。この間、女子の「暴力反対」発言に疑問を持った。

平沢と田井中は床に正座させられている。まあ・・・自業自得だ。

律

「ふえー、何で私だけ（泣）」

澪

「私達は軽音部でしょ。ライブやるの！」

じーっ。

澪

「な、何だよ渡」

渡

「あ、いや・・・秋山にしては積極的だと思ってよ」

少し遅れて琴吹も来た。そして、現在はテーブルに集まって話し合
い中(?)。

紬

「まあ・・・」

澪

「ムギはどう思う? 幾ら慌てずやっていこうって言ったって、もう
3カ月にもなるのに1度も合わせた事がないなんて」

紬

「まあまあまあまあまあ」

唯

「6回・・・」

渡

「一々数えるな」

紬

「わぁ！行きましよう是非！皆とお泊まりするの、夢だったの」

今の発言は幾つかツツコミどころがあるな。

律

「じゃあ海にする？それとも・・・」

漣

「だから！バンドの強化合宿だって言ってるだろ！」

渡

「田井中、お前話を脱線させるのいい加減やめろ」

唯

「あつ、でも幾らくらいかかるのかな・・・」

律

「そつだぜ」。キツくないか？」

そこで返答に詰まった秋山。どうやらそこまで考えていなかったら

しい。

渡

「更に俺が行くわけにはいかないだろ？」

漣

「な、何でだよ？」

渡

「考えてもみるよ。年頃の女子が4人もいて俺だけ男子、しかも同伴者無しだと色々問題が生じかねないだろ」

と、結構真面目に主張したのだが、コイツらには緊張感というものが無いのか、

唯

「大丈夫だよ、ワつくんは変な事しないって信じているし」

律

「そうそう。それに合宿なら全員で行かなきゃダメだろ」

渡

「（今の田井中にそんな事言われても全く同意しかねるのだが・・・）」

漣

「律の言う通りだぞ。渡もちゃんと来ないと」

渡

「んな事言ったってよ・・・」

今の所4人中3人が参加を要請中。琴吹、何とか言ってくれ・・・
と言いたいところだが・・・無駄だな。

渡

「分かった分かった。俺も参加する」

唯

「やった~~~~~!!」

渡

「で、話を戻すが結局場所は何処にするんだ、秋山？」

澪

「うっ！それは・・・ムギ？」

紬

「はい？」

澪

「別荘とか・・・」

紬

「ありますよ？」

即答すんな。それと・・・

4人

「あるんかい！」

まあ、いいとこのお嬢様だから別荘くらい持つてても別に不思議ではないか。

時間は経ち、合宿当日。

予想はしてたがここまで当たると何かもう怒る気にならない。

渡

「やっぱり平沢来てねえか」

律

「やっぱり最後は唯か」

紬

「まあまあまあまあまあ」

渡

「（なぜまた6回？）」

澪

「しょうがない。電話してみるか」

秋山が平沢の携帯に電話を入れる。ほどなくして繋がった様だ。

唯

「もしもし・・・」

澪

「・・・おはよう」

唯

「おはようございます・・・」

まさかこの時間に至ってまで寝ていたとわな。だが何故だろう。何故か怒る気になれない。

結局、その後バタバタして家を出た様子が秋山の携帯越しに伝わり、何とか予定していた電車に乗る事が出来た。

唯

「はあゝ、何とか間に合った」

律

「あれだけ寝坊するなって言っておいたのに」

唯

「えへへゝ、何だか興奮して眠れなくなっちゃって（笑）」

律

「つたく、小学生か（笑）」

澪

「・・・いや、そうでもないみたい」

秋山の隣には琴吹が眠っていた。因みにだが各々の席はというと、3人席で窓側から平沢、田井中、俺。反対側に秋山と琴吹である。

唯

「ムギちゃん・・・夢だったって言ったもんね」

そしたら琴吹が不意にフッフ、と笑いだした。

紬

「ウッフッフ・・・ゲル状がいいの」

澪

「（ゲル！？）」

唯

「どんな夢見ているんだろ」

渡

「確かに気になってきた」

律

「よし、写真撮つとこうぜ」

唯

「よしなよ、可哀想だよ」

律

「思い出思い出」

渡

「（随分安っぽいもんなんだな）」

琴吹の寝顔を撮った田井中。そのフラッシュで目を覚ましてしまった。

紬

「ん・・・あつ、ぐめんなさい」

唯

「ほら起きちゃった」

律

「へへ、悪い悪い。それよりそろそろ教えてよ。別荘って何処にあるの？」

丁度トンネルに差し掛かったところで、

紬

「えっと・・・もうすぐ！」

トンネルを抜けた瞬間、外の景色は1つの絶景だった。鷗かもめ（うみねこ？）が独特の鳴き声で飛び交い、水が太陽の光を反射して輝いていた。あれ、鷗かもめって上昇気流を利用して飛ぶ類の鳥類だったわけ？

漣

「海か・・・」

紬

「ええ、海」

1番喜んでいるのも言うまでもないが平沢と田井中。二人で勢いよく電車の窓を開けると潮の匂いが車内に入ってきた。都会では中々味わえないものだから、興奮してハイテンションになるのも分からなくはないが、少しは他の乗客の事考えるお前ら。それと今回はあくまでバンドの強化合宿ってのが目的で遊びに来ているんじゃないからね。反対側に座っている秋山が相当心配そうな表情をしている。もう何度目か分からないが心中察するぜ。

電車を降りて、琴吹が用意してくれた別荘に到着した。

見て一言目は・・・デケエ！今まで想像も出来ないものだったがこうして間近で見ると結構大きいものなんだなあ・・・と思ってい

たら、

「本当はもつと広い所に泊まりたかったんだけど、一番小さい所しか借りられなかったの」

律

「一番小さい！？これで！？」

渡

「十分大きいと思うが」

そこで突っ立っていてもしょうがないので中に入る。外見を裏切らず中も広い。俺たちみたいな一般人がそう易々と入っているのかと思っている一方で、やはりあの二人はそんな事を少しも考えていないのかどんどん中へ入っていった。先が思いやられるぜ。

澪

「ん、これは？」

部屋に入っすすぐの所に段差があつて、そこで食事が出来る様になつていた。その真ん中に様々なフルーツが器の様なものに乗つていた。これ何か名前あつたつけ？

紬

「あつ、ゴメンナサイ。何もしなくていいって言つておいたんだけど・・・」

寢室の部屋の戸を思い切り開ける田井中。もつと丁寧に扱え。破損でもして弁償沙汰になつたら幾ら請求されるか分かつたもんじやないぞ。

唯

「おおー！お姫様ベッド」

・・・うつとりしてこつちの話が全然耳に入っていない様だな。

キッチン。またもや田井中が冷蔵庫を思いつきり開ける。・・・壊れてもしらねえぞ。

律

「おおー！美っ味そうー！」

細

「ゴメンナサイ・・・（泣）」

何と御丁寧に松坂牛（？）が用意されていた。やっぱり令嬢の事となるとそれなりの用意をしないでとは使用人も思っただろうか。

細

「いつも出来るだけ普通にしたいって言っているんだけど・・・中々分かってもらえなくて・・・」

分かる気がする。お譲様とおもえる人と出会った人は少なからずそういう立場に憧れるものだが、片やお譲様と呼ばれている方はその生活が堅苦しくて普通の人達に憧れるものなのだろう。隣の花は赤い、いや、隣の芝生は青い？この場合どっちの方が適切なのだろうか？

取り敢えず練習用の部屋に案内してもらった。壁に琴吹やアイツの両親と思われる人の写真が幾つかあったな。父上はサーフィンが御趣味なのだろうか。別の1枚にはコンサート（？）でピアノを演奏している琴吹が写っていた。今度機会があればピアノの演奏も聞かせてもらおうとしようか。

練習部屋。そこも結構広くスペースが取られていた。側面の壁は一方が木張り、一方がガラスになっていて砂浜が見える様になっていた。部屋も涼しい。

紬
「どうぞ」

漣＆渡
「おお！」

紬
「暫く使ってなかったから、ちゃんと動くか心配だけど・・・」

秋山と俺で機材を確認する。

漣
「うん、大丈夫そう」

渡
「こっちもOKだ」

漣
「あれ、唯と律は？」

紬
「途中でいなくなっちゃったけど」

渡
「何しに来てるんだアイツらは」

漣
「しょうがないなあ」

そう言いながら秋山が自分のバックから取り出したのは私物のラジカセ。多分入っているテープはアレだな。

紬

「なあに、それ？」

漣

「ああ、これ？」

そのまま秋山はラジカセのスイッチを入れる。流れてきたメタル系と思われる曲。偶々部室で二人しかいなかった時間に先に秋山に聞かされたので俺は知っていた。

漣

「昔の軽音部のライブ。この前部室で見つけたんだ」

紬

「上手……」

漣

「私達より相当上手い」

渡

「何せまだ1度も合わせていないからな」

漣

「……何か聞いてたら負けたくないなって」

紬

「それで合宿に行こうって言い出したのね」

漑

「うん。でも……」

アイツの不安が良く分かる。音楽の演奏というものは演奏する人数が多ければ多いほど協調性が重要になってくるが少ないからといってそれが欠如していいわけではない。ましてやバンドとなればある意味オケーストラを演奏する交響楽団以上のものが必要な場合だつてあるかもしれない。だが、その認識は各々が持たなければ意味がなく、まるつきりその意識がない平沢と田井中に対して焦りを感じているのだろう。俺は秋山が変わったな……と思った。俺が知っている秋山は自分のやる事に責任は持つものの、自分から積極的に皆を引っ張って行こうとする様な性格じゃなかった。

紬

「負けないと思う」

漑

「えっ？」

紬

「私達なら」

渡

「……そうだな。まだ時間はある。あんまり裕著に構えてはられないがまだ挽回は出来るさ」

漣

「ムギ、渡……」

と、結構真剣なムードであったにも拘らず、

律

「よっし！泳ぐぞっ！」

唯

「Oh、イエーイ！」

その雰囲気をぶち壊しやがった。しかも早速水着に着替えているし。本格的に不安になってきやがった。

漣

「って早っ！練習は！？」

律

「先に行ってるから3人とも急いでねっ」

渡

「お前ら一体何しに来たんだ！」

と叫んだが既に外に行っちゃったようだ。まったく、こっぴう時の行動は迅速なんだよな。しかも……

渡

「おい琴吹、何処行くんだよ？」

紬

「少しだけ海に行かない？」

漣

「えっ、ムギ行くつもり？」

紬

「折角だし、ちょっと位なら・・・」

そのまま部屋を出て行ってしまった。

渡

「あゝあ、本気^{マジ}で危機感を覚えるわ」

ふと秋山を見たら何故か涙目。何だ、俺何か言っではいけない事を言ったか？

漣

「ウツ、ウツ、ウツ・・・私も行く（泣）」

はあ！？ミイラ取りがミイラになったのかよ。しかも気付けば何時の間にか平沢と田井中がドアからこっさり覗いてニヤニヤしている。俺がいること分かってんだろ。せめていなくなってからにしろよ。

等とは思ったが、考えてみれば流石に来て早速練習って言われても

流石にやろうと意気込むのはごく少数。・・・俺も行くか。ソ口鍊
をしても此処ではあまり意味はない。全員で合わせなければ意味が
ないのだから。

俺も砂浜へ向かった。若干の不安と、持ってきた私物の一つと、随
分甘くなったなと少し自分を自嘲しながら。

合宿！？（後書き）

今回は此処までです。

彰

「渡先輩が持つて行った私物って何ですか？」

それは次に明らかになるよ。

さて、この「合宿！」編で漣と渡を少し近づけようと思っています。

この話は多分4回位になるんじゃないかな。

感想、誤字脱字の指摘お願いします。ではまた。

合宿！？（前書き）

2回目です。

尚、今回は合宿の日取りを2泊3日とします。

合宿！？

「海、波音、浜辺にて」

唯

「無人島に流されて、早2週間か・・・」

律

「流された時はどうなるかと思ったけどな・・・」

唯

「でもこれはこれで楽しいよね」

律

「ハハ・・・おお、大物発見」

そこには波に打ち上げられた（俺達素人の目からすれば結構長めの）若布が一本。

律

「助かった・・・」

唯

「じつつあんです・・・」

漣

「何勝手な場面作っているんだ」

秋山が着替え終わり、タイミングが良かったので一緒に出てきた俺ら。

ふと3人を見ると、田井中と平沢が秋山のとある部分を見つめて何と言つか・・・とにかく負のオーラを出していた。それは決して（無論俺も含めて）男が関わってはいけない話だ。と、結論に至る前に突然、

律

「くっくっえ〜！！！」

と田井中が秋山の顔面めがけてビーチボールを投げた。それはクリンヒットし、その流れ弾が狙ったかのように俺の頭上へ。

漣

「ハゲッ！」

渡

「痛っ！」

おい、お前ら・・・と言う間もなく、

律

「唯、泳ぐぞ！」

唯

「うん！」

と海に向かって行っちまいがった。まったく・・・

漣

「あれ、渡が持つてるそれって・・・釣り具？」

渡

「ああ。どうせ予定通りにいかない事は最初から分かっていた事だし山だったら川釣り、海だったら海釣りが出るし。まあ、結果は海だったわけだが」

秋山は私物のカメラで色々な所を写していた。

俺は少し離れた岩場でルアーを付けて糸を投げた。

ヒュッ。

この投げる時の空気を切る音と、竿にググッと手応えが来る時の感触が釣りの醍醐味だ。

その頃、4人は正面の海で色々と遊んでいた様だ。

ナスカの地上絵にならって鳥の絵を描いてその真ん中に平沢が埋まっていた。何て言うか・・・滑稽だな。

琴吹は砂の建物を作った。これだけだと幼稚な事をやっていると思うかもしれないが、それは完全に教会か洋風なダンス会場か・・・とにかく見ている方がつい「おぉー！」と言ってしまう様なものだった。将来彫刻家になれるぞコイツ・・・

俺の方も数匹釣り上げた。

渡

「僕に釣られてみる？・・・ってウラ・ロスかよ」

そしてまた秋山は岩肌の道をゆっくりと歩いていた。が、ふと岩肌を見るとフジツボがびっしりと張りついていて。咄嗟に青くなる秋

山。その場から素早く離れ、耳を塞いでしゃがみ込む。

漣

「怖くない怖くない怖くない怖くない怖くない怖くない怖くない」
お医者さんに行くと、膝の皿にフジツボがびつしりと「わあ~~~~
~~~~~!!!!!!」

そんなこんなで時刻が夕方になったかと思える頃。とはいえ夏の時間帯は天候が雨にでもならない限り日照時間が長いので、正確な時刻は時計とか携帯を持っていないので分からないのだが。

唯

「は〜！海水飲んだ〜！」

律

「辿り着いたぞ、黄金の島ジパング！」

漣

「まだまだ」

・・・秋山、そのスイカどっから持ってきた。

漣

「折角海にに来たんだし、とことん楽しまないとここまで来た意味が……ああ！！練習！！」

律

「忘れてたのかよ」

漣

「ま、まったく、律が遊ぼうとか言うからだぞ」

渡

「（こっぴつを棒読みと言っのか……？）」

律

「1番楽しそうに遊んだのは誰だよ？」

漣

「ツーン……」

晩御飯は俺と田井中で作った。意外と言うと少し失礼になってしま  
うが、田井中は料理スキルが確立されている。小学生の頃に家庭科  
の調理実習で何度もそれを見てきた。

常日頃から面倒くさがりやで自分がやりたいと思うこと以外には動

こうとしないので、今回も説得に手間取るかと思ったが、意外や意外、あっさりと手伝うと言いだした。まあ、それはそれで助かるんだけどな。

というか、冷蔵庫に用意されている食材も食材なんだよな。調味料1つとつても、素人の俺から見ても分かる位の高級品揃え。正直俺達みたいな一般人が扱っていいのかと思えてくる。

律

「おい渡。何ボツとしてるんだよ。さっさと作るぞ」

渡

「ん、んああ・・・」

その手際の良さは健在だったらしい。鼻歌を歌いながら流れる様に作業をしている。練習もこんな感じでやってくれたらとりあえず文句はないのだが。

夕食を食べ終わり、食器洗いは・・・何故か俺だけ。調理までやったんなら食器洗いもついでに手伝えよ、と言いたかったが、まあ、いいか。琴吹はやらなくていいと言ったが流石にそれは最低限の礼儀としてやっておくべきことだろう。

一通り食器洗いが終わって練習部屋に入ろうとしたら、アンプから凄いい棒発音がしやがった。何事だと思ってドアを開けたら、ああ、そういう事か。平沢と田井中が睡眠モードに入っちゃったからアンプの音を耳元で聞かせて強引に起こした訳か。その証拠に二人が身を縮込ませてやがるし。

何とか二人を所定の位置に置いたのだが、眠り込んでしまった所で起こされて意識も虚ろ。とても練習など出来そうではねえな。

律

「なあ、今日はもうやめにしようぜ」

漣

「練習が目的で此処に来たの！」

律

「そりゃあそうだけど・・・」

次の瞬間、秋山は少し顔をニヤつかせて、

漣

「・・・そう言えば律、最近ちょっと太ったんじゃないか？」

律  
「へっ!?!」

漣  
「特に、お腹のあたりとか」

律  
「ええっ!?!」

漣  
「最近ドラム叩いてないからかな?」

律  
「うお~~~~~おりゃおりゃおりゃおりゃおりゃ  
やおりゃ~~~~~!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

滅茶苦茶にドラムを叩きだしやがった。まあ今ので目が覚めただろうし結果オーライか・・・と思っていたのだが・・・

唯  
「もうギター持てない・・・」

漣

「ええ!？」

ペタリと座りこみやがった。体力無さ過ぎだろ。

唯

「だってこのギター重いんだもん」

渡

「だから人の話はちゃんと聞けつつたんだよ。女子は軽い方が持ちやすいし、弾き易さも同様なんだ」

唯

「誰だこのギター買っつていったの!」

漣&渡

「お前だ!」

しかも本来なら25万円したのを琴吹が値切って5万円にしてくれたやつだぞ。もうちよつとありがたさを感じると言っても全く罰は当たらない気がする。

それから再び床に突っ伏してしまった二人。

唯

「そろそろ床温まってきたね」

律

「そうだな」

ゴロゴロと転がりながら別のパネルに移動する。コイツらといると頭痛のネタが尽きそうにない。

漑

「そんなに学園祭どうするつもりだよ?」

律

「だから、メイド喫茶がいいって言ってるだろ」

唯

「ええ、お化け屋敷がいいよ」

お前ら、頼むから発言はもう少し場と言葉を選んでくれ。じゃないともうそろそろまた秋山の堪忍袋が・・・

と思ったら田井中が上半身だけを起こして、

律

「はあゝ。唯、お前何にも分かつとらん。漣を見てみる」

と横目での視線。

漣

「な、何だよ？」

律

「漣ほどメイド服に合うやつ中々いないぞ。『黒のストッキング』、『純白のエプロン』、そして『メイドカチューシャ』。止めに『萌え萌え〜〜キュン?』・・・とか言ったりして」

不覚にもその姿を想像してしまったのは・・・本人は当然、誰にも明かせない事だ。

唯

「可愛いかも」

律

「・・・なんてな、冗談・・・」

ゴッソッ！！！！

・・・怖い。メツチャ怖い。合宿の計画を話し合ってたあの時とは比較にならない大きさのタンコブが出来てるぞ。腕が微かに震えている。

まあ、冷静に考えてみればあの場で「冗談」、は禁句だろう。本心ではなかったとしてもそれは言っではいけない筈だ。

外でかがり火をたいてひとまず休憩という事になった。というより元から休憩タイムに入っていた様な気がするんだが。

漣

「終わったらちゃんと練習するからな」

渡

「スイカ食うのか喋るのかどっちかにしろよ。というかキッチンと発音出来てるのが驚きだ」

俺と秋山が何故か観客の様なポジションになっていて、対するステージのサイドの両端に琴吹と田井中が。

平沢が草原を踏みしめる音を静かにさざめかせながらセンターに立ったその瞬間、

ドドンー！！！！

と花火をバツクにギターをかきならすその姿はそのまま絵に出来そうな出来栄えだった。秋山もその光景に釘づけになっている。夏の夜に花火が似合っている事の証明に十分なれるだろう。

とか思いながら鑑賞に浸っていたら、

パン！パン！

と止みやがった。オイ、これはないだろう。

唯

「あれ、もう終わり！？」

律

「予算がな・・・」

紬

「いつかきつと・・・」

律

「そうだな。武道館で派手にババババン!!!!・・・と」

唯

「武道館？」

律

「おいおい、目標はそこだつて決めただろ」

ああ、そういえばそんな大言壮語を言つてた様な気もするな。が無謀でも目標が定まっているのはいい事だし、意外にそういうものは気付かぬうちに実現してしまうものなのかもしれない。向こうで3人は武道館での衣装の色は何かいいかと話しているが、まあ、別段興味もわかない。

と、そこへ秋山が自分のラジカセのスイッチを入れた。

澪

「武道館目指すならまずこの位は出来なきゃな」

スピーカーから流れるメタル調。

律

「うお、上手いなあ・・・」

唯

「あれ、でもこれって・・・」

あつ、そうだ。もう間もなくアレがくる。止めろ、と言おうとした  
が遅かったようだ。

「お前らが来るのを待っていた・・・死ね~~~~~~~~」  
~~~~~!!!!!!~~~~~」

呆然と立ち尽くす秋山。耳を塞ぐ平沢、田井中、琴吹。俺は幸いこ
ういうのを聞き慣れているせいかな、そう苦痛にも感じなかった。ラ
ジカセのボタンがカチャリとなる。

唯

「うん？これって・・・」

紬

「テープがB面に変わったのね」

律

「なあんだ……ん？」

ふと横を見るとそこにいた筈の秋山がいない。何処に行つたのかと思つたら、ラジカセを放り出して別荘の方を向いて耳を塞いでしゃがみ込んでゐる。

零

「聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない
聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない
聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない
聞こえない……」

と、念仏のように繰り返しながら。

零

「聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない」「フジツボ・・・」
わ~~~~~~~~!!!!「膝の皿屋敷・・・」嫌だ~~~~~
~~~~!!!!嫌だよ・・・」

ああ、こりや重症だ。これ以上やると引つ込み思案が更に酷くなるぞ田井中。

とうとう自分の殻に閉じこもってしまった。

紬

「りっちゃん、やり過ぎよ」

律

「ごめんごめん。本当に幽霊がいるわけじゃないから・・・」

そしたら秋山が顔だけこつちを向いたのだが、その表情はつい護つてあげたくなる様なものだった。

漣

「・・・本当？」

唯＆律

「きゅるるりん！！」

よくわかんねえ発声をするなお前ら。

唯＆律

「萌え萌え〜キュン？」

練習部屋に戻って、

紬

「唯ちゃん、本当に出来るの？」

唯

「うん！見てて。えっと・・・」

呼吸を整えた平沢がピックを弦にあてたその瞬間にあのラジカセから流れた節の一部のソロが再現された。

唯

「どう？」

紬

「凄い、完璧」

渡

「本当に1回聞いただけで再現したのか。凄えな」

唯

「えへへ。でもミヨーンってところが分からなくて」

律

「ミヨーン？」

渡

「チョーキングか」

唯

「チョーキング？」

渡

「チョーキングつつのは音を出しながら弦を引つ張るギタリストの技術の一つ。単に上に引つ張るだけの場合もあればブラシの様にゴシゴシやる場合もある。こんな感じにな」

と俺は自分のレスポールを構えて模範を見せた。

唯

「おお、カッコいい！」

渡

「感心しないでやってみな」

平沢のチョーキングは・・・可もなく不可もなく。初めてやったのだから評価を付けたりすることはない。他のコードや技術と同様、地道に練習するだけだ。

渡

「・・・ん？」

唯

「ぷっ・・・ククク・・・あっはははははは・・・これなんか変・・・」

渡

「どうしたんだ一体」

律

「ツボだったんじゃないか？」

澪

「フジツボ!？」

何でそこに行きつくんだよ!？

時刻はもう11時を回っただろうか。今まで気付かなかったが風呂に入ってなかった。男の俺があの人と入る訳にはいかない。予め言っておくが俺はアツチの趣味はないけどな。と思ったらいつも間にかアイツらが先に入っていやがった。このままボケっとでもしてろってか。あんまりだぜそれは。

唯

「は、まさか露天風呂まであるとはね」

紬

「今日は本当に楽しかったわ」

澪

「うん。ムギが言ってた通りそんなに心配しなくても良かったのかもな」

？

「だったらもつと遊べばよかったじゃないか」

漣

「誰だ!？」

律

「私だ」

「長え。女性は風呂が長いと聞いた事があるがいくらなんでも長すぎる。」

ノックをしてドア越しに、

渡

「おい……」

唯

「ひゃっ!？」

漣

「わ、渡！？」

律

「な、な、な、何で此处に！？」

渡

「一応聞いておきたいんだが、お前ら全員上がるまであとのくら  
いかかる？」

律

「そりゃあ・・・30分位？」

渡

「・・・早目に出てくれよ。俺がいつまでも入れねえから」

結局約40分後に全員出てきた。よくのぼせなかったな。漸く風呂  
に入れるってか。少し汗っかきな体質だけあって背中とかが痒かつ  
たからやっとかっていう感じだ。

プール状の露天風呂。贅沢を言うなら岩場とかのほうが良かったのだが、まあそこまで我儘は言わなでおく。

空には月が見えた。偶にはいいものだな。湯加減も丁度いい位。疲れも取れる。まあ何だかんだで色々あったが終わり良ければ全てよし、結果オーライというやつか。

丁度あがって着替えも終わって居間に行ったらそれぞれ寝巻に着替えて……いると思っていたがそれぞれ来た時のままの服装だった。

渡

「おい、そろそろ寝ないと色んな意味で体に良くないだろ」

律

「何言っているんだよ。渡があがるのをずっと待ってたんだぞ。風呂に入っている時間が長すぎるんだよ」

渡

「明らかにお前らの方が長かったと思うのだが。まあ、待たせたのは悪かったな」

唯

「じゃあ寝る場所決めよう？」

渡

「琴吹、場所は何ヶ所あるんだ？」

紬

「えっと、ここにあるのは全部で3か所ね」

渡

「それ、俺を待っている必要性あったのか？」

律

「ん？だつてさ。渡が私達のうちの誰かと一緒に寝たいと思つてたりするかもしれないし」

渡

「・・・田井中、今お前は俺にぶん殴られても文句を言えない事をサラリと言いやがったよな」

律

「例えば・・・澪と一緒に夜這いとかしちゃったりして・・・」

渡

「田井中!!!」

と俺が怒鳴り終わる前に、

ゴチン!!!!!!!!!!!!!!

今までとは比にならないタンコブが出来てた。練習部屋で出来たヤツですら今のやつから見れば大した事が無さそうな事の威力。というよりこの状況で何も言わない平沢と、何か危なっかしそうな表情をしている琴吹。この中でまともなのは秋山だけなのか……？

結局秋山と平沢、琴吹と田井中、そして俺というペアになった。本当にこれはわざわざ話し合う事だったのだろうか。

部屋に案内されてとりあえず掛け布団の上に大の字になってみる。ふう、と溜息をつく。

体力面もそうだが精神的にもかなり疲れた。これ以上頭痛の種が増えない事を願うばかりだ。

……眠れない。普段から布団で寝ている事もあるかもしれないが、先ずベッドで寝慣れていない、次に俺は幼少期からあまり外泊した事がない。1時期両親の仕事の都合上、親戚に預けられた事はあったが俺の中でそれは外泊には入らない。

寝れない。眠気がちつともない。別荘のベランダの窓を開け、外に出てみる。

海のさざ波がザザッと静かに独特のリズムを刻む。まだ出ていた満月。白い砂浜。この光景をそのまま描写したらいざという時に心が和むかもしれないが生憎絵を描くための道具は持ち合わせていない。この光景を保存しておく方法が携帯だけというのは何とも嘆かわしい限りだ。と、何時かの様に鑑賞に浸っていると、

「あれ、渡もいたのか」

窓を開けてコッチに来たのは……秋山だった。

渡

「どうしたんだよ秋山。こんな時間に」

漣

「何か寝付けなくてな。疲れている筈なのにな。渡は？」

渡

「俺も似たり寄ったりってとこだ」

漣

「・・・なあ、隣いいか？／／／／／」

渡

「ん？まあ、別に構わねえけど」

とは言いつつも、内心少し緊張していた。秋山が自分から男の傍に行きたいとか言い出す事自体、俺の記憶の中じゃ、あり得ない事だったし。

が、やっぱり相当緊張しているのかそこから会話がない。俺から話を振ってもよかったのだが怯えて引っ込んだら意味がない。と思っていたら・・・

不意に俺と秋山の指が触れた。

漣

「わぁっ！ゴメン！」

渡

「・・・そんなに怯える事か？」

漣

「だ、だって／＼／＼／」

渡

「・・・星が綺麗だな」

俺はわざと話題を逸らした。

漣

「うん、そうだな・・・」

意外に話に乗ってきた。

渡

「あそこの砂浜と、海と、月と、星をスケッチブックがあつたらスケッチしたいもんだけどな」

漣

「渡ってスケッチとかしてたっけ？」

渡

「いや。ただあの景色はぜひ残しておきたいって何か思ってた。昼の砂浜もいいけどこうやってしていると夜の砂浜も一段違ったモノがあるよな」

漣

「ああ、何となく分かる気がする」

渡

「・・・此処にしていると昼間の疲れを忘れそう気がする。田井中達には結構振り回されたからな。お前も大変だな」

漣

「そ、そんなの渡だって同じだろ」

渡

「どうか・・・」

そこで会話はまた途切れた。その光景に見惚れていた俺。が、流石にそろそろ寝なければ翌日寝不足な状態で練習しなければならない事になる。

渡

「おい、そろそろ戻る・・・」

ふと見ると秋山は俺の右肩に体を傾けて静かな寝息を立てていた。

渡

「・・・つたく、こんな所で寝てたら風邪ひいちゃうだろ」

秋山を・・・その、俗に言うお姫様何とかをして抱き抱えてベランダをあとにしたのだが・・・

こんな時間帯に部屋の電気を付けて平沢の睡眠を妨害してしまうのは気が引ける。

渡

「・・・しょうがねえな」

俺は秋山を俺に割り振られた部屋で降ろして静かに布団をかぶせて  
やった。

渡

「・・・・オヤスミ」

俺はどうしようか、と考えたが幸い練習部屋が開いていたのでそこ  
に目覚ましだけ持って入った途端、眠気が襲って一気に俺の意識は  
深い所へと落ちていった。

合宿！？（後書き）

渡

「・・・・・・・・」

彰

「・・・・・・・・」

どうしたの二人とも黙って。

渡

「何処から突っ込もうか・・・」

彰

「まず冒頭でしょう。あれはどう考えたって某京アニの某キャラのキャラソン形式パクッテいるじゃないですか」

咄嗟に思いついたにしては結構いいと思ったんだけどな。

彰

「もう少し何かないんですか」

渡

「他にも色々あるが・・・一番言いたいのは、更新が遅すぎる！」

仕方ないだろう。ここまで長くなるとは思っていなかったんだし。

渡

「確かにこれだけ長けりゃ慎重に書くのも分からなくはないがもっと早く出来る筈だぞ」

・・・精進します。

楽しみにして頂いている方には本当に申し訳ありません。漸く更新です。

いつもど通りの口調ですが感想等を遠慮なくお送りください。では。



どうしてそんな事を！？わ、私としてはちょっとだけ嬉しかった・・・

いやいやいや！そうじゃなくて！どうして私の部屋じゃなくて自分の部屋に！？というより渡はどこに行ったんだ？

漣

「わあああああああ！！」

つい、勢いよく部屋から飛び出してしまった。

？

「ふあれ、漣ふあんほうひはの？」

漣

「わあああああああ！！」

部屋に出た途端、ムギがいたのでつい大声を出してしまった。

紬

「きゃっ！」

漣

「ム、ムギ。こゝこれは誤解だ。私にも何かなんだかサッパリで・・」

紬

「あら、漣ちゃんおはよう。でもどうして渡君の部屋に？」

漣

「いやだから私にも何かなんだかわからなくて！というより渡を見ていないか？」

紬

「渡君？私は見ていないけど部屋にいないの？」

漣

「ああ。姿が見当たらない」

そこへ、

？

「何ゝ、何があつたのゝゝゝ」

？

「なんかメツチャ凄い大声が聞こえたけど・・・」

漣

「はわわわわわわっ！」

漣は滅茶苦茶に動揺していた。入口を確認すれば靴はキッチンとあるから外出したという線はない。

漣

「い、い、いい一体何処に行ったんだ!？」

唯

「み、漣ちゃん落ち着いて」

律

「そうだぜ。こんな所で慌てたってどうにもならないだろうし」

漣

「そ、それもそうだな」

紬

「外に出ていないって事はこの建物の中に入るって事よね」

律

「この中で後探していない所といえば・・・」

唯

「奥の部屋だけだよ」

紬

「昨日鍵はかけなかったから、もしかして・・・」

彼女達は一斉に部屋へと向かった。そこで見たものは・・・

紬

「きゃ~~~~~~~~~!!!!!!」

漣

「そ、そんな・・・」

律

「な、なんで・・・何で渡が・・・」

唯

「・・・・・・」

4人とも愕然としていた。目の前の光景が信じられなかった。

何故ならそこにあったのは・・・口から赤いものを吐き出して倒れている渡の姿だったからだ。

紬

「もしかして渡君、結核でも患っていたのかしら」

律

「私達と一緒にいた頃はそんな事聞いていないぞ！」

漣

「高校に入ってからだってそんな風には見えなかった！」

唯

「ワっくん・・・」

漣がその手を握りしめていた。

漣

「渡・・・どうして・・・」

？

「・・・感情に浸っている所悪いんだけどな」

4人

「わああああああああああああああああああ！！！！！！」

一斉にその場から飛び跳ねる様に引っ込む。

渡

「何だよ・・・」

律

「い、い、生き返った~~~~！！？」

渡

「人をゾンビみたいに言うな！」

紬

「こ、こんな所で何してたの？」

琴吹も若干声が震えている。

渡

「何って・・・見りや分かるだろ。寝てたんだよ」

律

「寝てたって・・・だってさっきまで血を吐いて」

渡

「????血ってコレの事か」

傍に在った赤いものをヒョイと摘んで持ち上げる。

漣

「ひっ！」

渡

「ハンカチ程度でそんなビクビクするなよ」

唯

「ハンカチ・・・」

律

「紛らわしい事するなよ！」

渡

「お前らが勝手に勘違いしたんだろうが。まったく、あんまりいい目覚めじゃねえなあ・・・さてと、朝飯作るか」

行動できていないが、かと言ってこのままボーっとしている訳にもいかない。そもそも此処には軽音部の合宿という名目の元に来ているのだ。海があるからはしゃぎたくなるのは分かるにしたってそれで時間を潰していたら秋山が提案した合宿の意味は殆ど無くなっちゃう。

冷蔵庫にはとりあえず足りなさそうな食糧はなさそうだ。昨夜の晩御飯でも結構食べた様な気もするが、それでもまだまだドンと来いという感じである。流石にご令嬢の所は格が違うようだ。尤も、琴吹本人はそれを少しコンプレックスの様に思っている様だから直接口に出したりはしないが。

唯

「ワっくんの作る料理って美味しいね」

律

「コイツ男だけど結構色んなレシピ知ってるんだぞ」

渡

「まあその半分位は田井中に教えてもらったんだけどな。部長としては結構危なっかしい面もあるが料理に関してはとりあえず文句はねえ」

律

「取り敢えずってなんだよ／＼／＼／」

渡

「そのまんまの意味だ。ホラさっさと食べる。皿洗えねえし練習時間減っちゃう」

紬

「渡君、そこまでしなくても・・・」

渡

「ダメだ、やるべき事はキチンとやる。場所を提供してくれたなら最低限やるべきことはやるべきだ」

漣

「そつだぞ。折角ムギがこの場所を用意してくれたんだからちゃんと練習するんだからな」

唯

「ほい」

完全に生返事だな。まったく、ベランダで今日の練習の対応策を考えておいて正解だった。

渡

「んで、今日午前中の予定は？」

律

「泳ぐぞ〜!」

渡

「・・・・・・・・」

澪

「・・・・・・・・」

まあ言うまでもないが田井中と平沢は遊ぶ気満々。琴吹はニコニコしているだけ。まあこいつはちゃんと練習する時はするからその点は問題ないのだが促す事をしないからなあ。秋山は大変だったろう。恐らく中学の3年間、俺がいなかった分苦労している筈だ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4260p/>

---

けいおん！Another school story

2011年11月14日23時23分発行